

第四章 同定・分析

第1節

住吉貝塚出土の植物遺体

札幌大学 高宮広土

1) 遺跡の概要

a:遺跡の所在	鹿児島県大島郡知名町住吉兼久
b:遺跡の名称	住吉(すみよし)貝塚
c:調査の機関	知名町教育委員会
d:調査担当者	森田太樹 堂込秀人
e:発掘期間	平成13年~平成16年
f:文化	縄文時代晩期文化
g:遺跡の年代	1000 BC~400 BC

2) バックグラウンド

奄美諸島や沖縄諸島を含む琉球列島先史時代の人々にとって植物食はおそらく重要な食料源であったと考えられるが、動物遺体と比較して微小でさらに脆い植物遺体を回収することは容易なことではない。しかしながら、ここ10年程のフローテーション法の発掘調査への導入により、南島中部圏先史時代における植物食利用が徐々に理解できるようになっている。例えば、奄美大島笠利町では、少なくとも5~8世紀まで狩猟採集の時代であったこと、グスク時代の赤木名グスクからは、イネが検出され、この頃の生業を植物遺体で示したと同時に、おそらくイネが重要な食糧であったこと等である。沖縄諸島においても同様な調査が実施され、縄文時代前期からグスク時代にかけての植物食利用が解明されつつある。すなわち、奄美・沖縄諸島では、おそらくグスク時代直前まで、狩猟採集の時期であったであろう(高宮 印刷中)。

今回の住吉貝塚における調査は、以下の点で非常に重要と思われる。まず、奄美大島および沖縄諸島において植物食利用が理解されつつあるが、沖永良部島に関しては、先史時代における植物食利用の情報は隣接する神野貝塚のみである(上村・本田 1984)。つまり、沖永良部島先史時代における植物食利用は殆どわかっていない。次に、奄美諸島および沖縄諸島のいくつかの遺跡より植物遺体が回収され、その傾向が見えてきつつあるのが現状であるが、実は縄文時代晩期の遺跡からシステムティックに植物遺体は回収されていない。現段階において、この時期における植物利用は縄文時代後期および弥生~平安並行期のデータをもとにしての仮説のレベルである(高宮 印刷中)。沖縄県立埋蔵文化財センターでは、2005年10月25日から11月27日にかけて「七つの謎…沖縄貝塚時代のミステリー」という企画展が開催されたが、この時期における植物食利用はそのミステリーの中のひとつとなっている(沖縄県立埋蔵文化財セン

ター 2005)。よって、住吉貝塚から植物遺体を得ることができれば、少なくとも一つのミステリー解決への前進となると思われる。

最後に、上記の縄文時代晩期に関する「仮説」とは、この時期の生業も狩猟採集であったであろうというものである。もし、この仮説が適切であるとすると、沖永良部島を含む少なくとも南島中部圏の先史時代の生業が狩猟採集であった可能性が高くなる。この事実は、世界的にみて大変貴重なデータとなると思われる。世界的にみて、この地域のような島¹で狩猟採集を生業の糧として生活を営んだという情報は殆どないからである(Keegan and Diamond 1987; 熊谷等 2005)。あるいは、筆者が国際学会等でこのようなケースについて質問したことが何回かあるが、今の所類似を示してもらったことがない。そのため狩猟採集民が活躍した島々は、世界的にみてもこの地域のみかもしれない。さらに、この生業が縄文時代後期から晩期にかけてさらに弥生~平安並行期まで継続したとなると、世界的に例のないデータとなるかもしれない。このように、住吉貝塚における植物食利用の分析は大変重要である。

3) 扱った資料

今回扱った資料は、4号住居跡(247リットル)、5号住居跡(293リットル)、8号住居跡(54リットル)、11号住居跡(658リットル)、および12号住居跡(473リットル)より回収された土壌サンプルをフローテーション処理したものである(カコ内は土壌サンプル量)。合計1725リットルの土壌が植物遺体検出のために回収された。なお、土壌のサンプリングおよびフローテーション処理は知名町教育委員会によって実施された。

4) 検出された炭化植物遺体

計1127(点/片)の植物遺体が確認された。その内訳は以下の通りである(表1)。

イタジイ *Castanopsis Sieboldii* (Mak.) Hatusima

イタジイが1点、11号住居より検出されている(写真1)。写真1のサイズ(長さx幅x厚さmm)は8.6x5.2x6.5mm。

タブノキ *Machilus thunbergii* (S. et Z.) Kostermans

タブノキが1片、11号住居から回収されている(写真2)。写真2のサイズ(長さx幅x厚さmm)は、4.6x5.4x3.3。

¹ 「このような島」とは面積が狭く、大陸や大きな島からの距離があり、大型海獣がコンスタントに得られない島々のことをさす。

シマサルナシ *Actinidia ruga* (S. et Z) Planch. ex Miq.

シマサルナシが、5号住居および8号住居から1点、11号住居から7点、12号住居から10点の計19点検出された(写真3)。写真3のサイズ(長さx幅x厚さmm)は、1.4x0.9x0.8。

堅果類子葉

堅果類の子葉と思われる破片が、計12片検出されている。その内訳は、4号住居1片、5号住居1片、11号住居9片、および12号住居から1片である。おそらくイタジと思われる破片も含まれていたが、保存状態がそれほど良くなく、このカテゴリーに含めた(写真4、写真5)。写真4のサイズ(最大長x最大幅x最大厚mm)は、6.5x3.6x3.3。写真5のサイズは、6.4x3.3x1.8。

堅果類子葉?

上カテゴリーの「堅果類子葉」より、さらに保存状態は悪いが、堅果類子葉の破片と思われる植物遺体をこのカテゴリーに含めて分類した。4号住居より2片、11号住居より7片、および12号住居より1片回収されている。

タブノキ?

タブノキ葉と思われるが、保存状態が悪く、上記の「タブノキ」カテゴリーに含まれない植物遺体をこのカテゴリーに入れた。11号住居跡より9片検出された。

堅果類子葉/タブノキ子葉

保存状態が悪く、全て小破片ではあるが、おそらくこれらカテゴリーのいずれかに属すると思われる植物遺体をこのカテゴリーに含めた。5号住居から1片、11号住居から19片、および12号住居跡から2片の計22片がこのカテゴリーに含まれる。

堅果皮?

堅果皮と思われるが、そのほとんどが1mmx1mm前後のサイズなので、堅果皮?のカテゴリーに含めた。4号住居跡から16片、5号住居跡から37片、8号住居跡から2片、11号住居跡から135片、そして12号住居跡から47片の計237片を堅果皮?とした(写真6)。写真6は、堅果皮?の中でも大きい方で、そのサイズ(最大長x最大幅mm)は、2.9x2.7。

不明

3種の不明種子(計16点/片)が回収されている。不明1: LF No. 16 (2片)、LF No. 30 (1片)およびLF No. 39 (2片)から計4片得られている。全て破片であるが、表面に浅い数条の縦皺がみられる。大型の植物遺体破片と思われる。LF16の不明1 a,b (写真7)は、

同一の植物遺体に属する。不明1 aのサイズ(最大長x最大幅x最大厚mm)は、5.4x4.9x4.9。不明1 bのサイズ(最大長x最大幅x最大厚mm)は、6.5x4.1x4.3。

不明2: LF No. 18 (5粒/1片)、LF No. 19 (1片)、およびLF No. 39 (1粒)から計8 (粒/片) 回収された。腎臓型で、マメ科の可能性がある。写真8のサイズ(長さx幅x厚さmm)は1.4x 0.9x0.7。

不明3: LF173より4片検出されている。これも全て破片で、全体の形状は確認できない。表面に葉脈上の細い隆条が観察される。大型植物遺体核の破片と思われる(写真9)。写真9の(最大長x最大幅mm)は、9.3x6.6。

同定不可能

計800片、同定することが不可能な植物遺体が検出された。そのうちいくつかは、堅果類子葉/タブノキ子葉?に含まれるかと思われたが、そのためには保存状態が十分ではなかったため、同定不可能のカテゴリーに含めた。

5) 考察および結論

まず、今回5住居跡(計1725リットル)の土壌サンプルを回収したが、回収された植物遺体は全て野生種に属するもので、栽培植物は含まれていなかった。神野貝塚では、タブノキは報告されているが(上村・本田1984)、ここでも栽培植物は検出されていないようである。沖永良部島では、縄文時代後期および縄文時代晩期には、おそらく栽培植物は知られていなかったと思われる。住吉貝塚における植物遺体分析結果は、また、奄美諸島および沖縄諸島の縄文時代晩期の生業が狩猟採集であったことを支持するものとなった。すなわち、沖縄諸島や奄美大島の遺跡から蓄積されたこれまでのデータを考慮すると、縄文時代晩期も狩猟採集の時期であったと思われるが、今回の調査結果は、この仮説をさらに肯定するものとなった。この結果は、「沖縄貝塚時代中期のミステリー」の一ミステリー解明の第一歩であると同時に、大変貴重な結果であると思われる。それは、世界的なレベルでみると、沖永良部島を含む少なくとも南島中部圏は、「狩猟採集民のいた島」として大変珍しいケースであるからである。今後は、植物遺体のさらなる分析に加え、動物遺体の分析等も考慮しつつ、いかにして彼らが狩猟採集という生業で人口を維持することができたかを解明する必要があると思われる。沖永良部島という面積の狭い空間で、狩猟採集で生存するためには、沖縄諸島やその他の奄美諸島の人々とのコンタクトあるいはこれらの島々への遊動も意義ある方法であったと思われる。今後このような点にも注目するべきであると思われる。

次に、住吉貝塚出土の植物遺体分析結果をマイクロレ

ベルでみてみたい(表2~6)。同定不可能の植物遺体を含めて、検出量の最も多かった住居跡は、11号住居跡(568植物遺体)で、続いて12号住居跡(320植物遺体)、5号住居跡(122植物遺体)、および4号住居跡(88植物遺体)となる。最も少なかった住居跡が8号住居跡(29植物遺体)であった。この差は、土壌サンプルの量に比例すると思われる。実際、土壌1リットル中の植物遺体数を算出してみると、以下ようになった。11号住居が最も高く、1リットル中0.86(片)の植物遺体、次いで12号住居(同)0.68、8号住居(同)0.54、5号住居(同)0.42で、最も植物遺体の回収率が低かった住居跡が4号住居で(同)0.36であった。分布密度に関しても、絶対数と似たような傾向にある。11号住居が絶対数が最も多く、密度も高かったことになるが、この住居が他の住居と比較して長期間利用されたのか、何度も繰り返し利用されたのか、あるいは他の住居と異なる機能を有していたのか、今回の結果からは言及できない。ただ、不明炭化種子が11号および12号住居跡のみから回収されていることは興味深い。住吉貝塚においては、住居跡にもかかわらず植物遺体の回収率は低かったという印象を持ったが、この低さが自然的要因であるのかあるいは文化的な要因であるのか、今後の検討課題の一つであろう。

住吉貝塚からは、少なくとも14の住居跡が確認されているが、これらの定住性も問題点の一つであろう。すなわち、彼らは一年を通してここに住んでいたのか、あるいは季節的にここで生活を営んでいたのであろうか。今回の分析結果から、この質問に関して十分な答えは言いえないが、イタジイ、タブノキ、およびシマサルナシは、秋に集中して収穫できるようなものである。特に、シマサルナシに保存方法がなかったとすると、今回多く検出されており、5号住居跡、8号住居跡、11号住居跡、および12号住居跡は、夏から冬にかけて利用された住居跡かもしれない。

今回対象となった5住居跡のうち、5、11、および12号住居跡からはサブサンプリングがなされているので、このレベルで簡単に報告したい。

5号住居跡(表3)

LF No. 92-98は住居跡の(東)側からサンプルされたことになっている。(東)側からは同定不可能の植物遺体が6片確認できたのみである。植物遺体は(東)以外に主に分布していたようである(116片)。分布密度は、(東)側土壌1リットル中0.02(片)の植物遺体に対し、その他のサンプリング地点では(同)0.49であった。

11号住居跡(表5)

LF No. 6-8、49-74は住居跡の(北)側、LF No. 10-48は(南)側、およびLF No. 75-91は(西)側か

ら回収されたことになっている。絶対数では、北(側)=176植物遺体、南(側)=308植物遺体、および西(側)=82植物遺体であり、(南)側により植物遺体が集中しているようである。分布密度でみると(北)側；土壌1リットル中0.85(片)植物遺体、(南)側；(同)1.02、および(西)側；(同)0.56であった。(東)側からサンプリングされていないようなので残念であるが、(北/南/西)側の中では、(南)側に植物遺体が集中しているようである。

12号住居跡(表6)

LF No. 126-132、147は住居跡の(東)側、LF No. 152-156は(西)側からサンプリングされている。(東)側からは11植物遺体、(西)側からは20植物遺体で、その他から287植物遺体が回収されている。分布密度でいうと、(東)側；土壌1リットル中0.16(片)植物遺体、(西)側；(同)0.56、およびその他(同)0.77であった。分布密度からいえば、ここでも東側が極端に低いようである。5号住居跡と12号住居跡の2例のみでは想像にすぎないが、(東)側は特別な機能-例えば出入り口があったのかも知れない。

以上、サブサンプリングを行った住居跡では、若干植物遺体の分布差がみえるようである。今回は土壌を回収し、植物遺体を検出することが主な目的であったようであり、土壌は一括してサンプリングされた(森田、私信による 2004)。しかしながら、上述の分布差にみられるように、住居跡内における植物遺体の分布は一様ではない。今後このようなパターンが上記の2例のみなのか、他の住居跡にもみられるのか、確認する必要がある。さらに、このようなパターンがみられるのであれば、その要因を追求することは、(過去の人々の行動パターンを理解することにつながる)十分に価値があると思う。そのためには、土壌のサンプリングも他の遺物と同様にしっかりとサンプリング地点を記録し、土壌をサンプルすることが望ましい。

最後に、住居跡からの土壌のサンプリングということでもかなり期待したが、植物遺体の分布密度でも触れたように、回収された植物遺体はそれほど多くはなかった。このことは、沖永良部島をはじめ奄美諸島や沖縄諸島の先史時代の遺跡から植物遺体を回収することは容易ではないことを示唆している。しかしながら、同時にフローテーションを導入することにより、肉眼ではまず確認することのできない植物遺体を回収することが可能であることも示している。すなわち、フローテーションを利用しなければ、植物遺体を回収することは不可能に近いのではないであろうか。奄美諸島では、笠利町用見崎遺跡、安良川遺跡、マツノト遺跡、および赤木名グスクでフローテーションを導入したが、いずれの遺跡からも植物遺体が回収されており、徐々に過去における植物利用がみ

えてきたように思える。奄美諸島・沖縄諸島、あるいは琉球列島における先史時代の植物食利用を解明するためには、このアプローチは必要不可欠と思われる。

謝辞：

このような機会を与えて下さった知名町教育委員会森田太樹氏および鹿児島県埋蔵文化センター堂込秀人氏に心より感謝申し上げます。また、調査期間中は、森田氏、堂込氏をはじめ知名町教育委員会大山俊氏および林富義志氏に大変お世話になり、沖永良部島滞在を有意義に過ごすことができました。また土壌のサンプリングおよびフロッテーションは、根気のいる肉体労働ですが、それを主に実行して下さったのは森田氏と木下光氏でした。彼らの協力なしには、今回の報告は書き上げることができなかつたと思います。最後に、トロント大学留学中は、Dr. Gary Crawford の Lab. で植物遺体を分析することができました。Crawford 教授のご厚意に感謝申し上げます。

参考文献

上村俊雄・本田道輝

『南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究』鹿児島市：鹿児島大学

熊谷誠等

2005

「ヒトによる島々への植民：生物地理学的な観点より(Keegan and Diamond 1987 邦訳)」「南島考古」24：35-81

沖縄県埋蔵文化財センター

2005

「七つの謎…沖縄貝塚時代中期のミステリー」西原町：沖縄県埋蔵文化財センター

高宮広土

印刷中

「狩猟採集民の島環境適応への挑戦：先史沖縄諸島の生業」『西太平洋諸島の生活と文化：環境と資源利用の人類学(仮題)』印東道子(編)東京：明石書店

Keegan, W.F. and J.M.Diamond

1987

Colonization of Islands by Humans: a biogeographical perspectives. *Advances in Archaeological Theory and Method*, ed. by M. Schiffer, vol.10: 49-92. New York: Academic Press.

表1：住吉貝塚出土の植物遺体

遺体	土壌サンプル量 (g)	浮遊物重量 (g)	イタジイ (g)	タブノキ (g)	シマサルナシ (g)	聖果類子葉 (g)	聖果類子葉? (g)	タブノキ? (g)	聖果類/タブノキ子葉 (g)	聖果皮 (?) (g)	不明 (g)	特定不可 (g)	合計 (g/片)	
4号住居跡	247	191.61				1	1	2		16			69	88
5号住居跡	293	184.32				1	1		1	37			82	122
8号住居跡	64	42.36								2			2	2
11号住居跡	658	448.9	1	1	7	9	7	9	19	135	12	388	568	668
12号住居跡	473	787.04			10	1	1			2	47	4	255	320
合計	1725	1654.23	1	1	19	12	10	9	22	237	16	800	1127	

表2：4号住居跡出土の植物遺体

LF No.	土壌サンプル量 (g)	浮遊物重量 (g)	イタジイ (g)	タブノキ (g)	シマサルナシ (g)	聖果類子葉 (g)	聖果類子葉? (g)	タブノキ? (g)	聖果類/タブノキ子葉 (g)	聖果皮 (?) (g)	不明 (g)	特定不可 (g)	合計 (g/片)	
191	9	6.21					1				7		1	9
191	7	4.53						1						2
192	10	7.46												
193	10	6.11											3	3
194	10	5.65											2	2
195	11	5.25								1			5	6
196	8	4.76												
198	9	5.56												
199	10	4.66				1					3	3	7	7
200	12	17.35												
201	9	5.5											4	4
202	10	12.04												
210	13	13.27											6	6
211	11	8.72												
212	10	8.69												
213	13	7.95								1		9	10	10
214	11	4.56											1	1
215	8	5.49											12	12
216	7	4.65											3	3
217	8	6.75								1			4	5
218	9	12.46								3			7	10
219	14	12.95											2	2
220	14	9.5												
221	4	10.83											4	4
4号住居跡合計	247	191.61					1	2			16		69	88

表3：5号住居跡出土の植物遺体

LF No.	土壌サンプル量 (g)	浮遊物重量 (g)	イタジイ (g)	タブノキ (g)	シマサルナシ (g)	聖果類子葉 (g)	聖果類子葉? (g)	タブノキ? (g)	聖果類/タブノキ子葉 (g)	聖果皮 (?) (g)	不明 (g)	特定不可 (g)	合計 (g/片)	
1	7	4.65								1			3	4
2	9	12.05											16	16
3	4	1.12											2	2
4	8	6.38							1	1			1	3
5	8	3.18											5	5
99	8	1.95												
100	6	5.72												
101	7	1.09												
102	5	2.28												
103	6	7.19												
104	8	4.18											2	2
105	4	1.98												
106	7	8.31											2	2
107	7	5.11											2	2
108	7	2.01												
109	6	2.85								6		1	7	7
110	7	2.61												
111	6	2.14			1	1				12		1	15	15
112	7	3.87												
113	9	8.43											8	8
114	8	9.51											3	3
115	7	2.86												
116	10	6.28											9	9
117	8	1.74								3			6	9
118	8	4.11												
119	11	10.54												
120	8	5.38												
121	6	2.74											4	4
122	8	5.03								3			3	6
123	8	2.91								4			8	12
124	9	9.95								2			3	5
125	10	5.07												
小計	236	150.33			1	1			1	37			76	116
192	10	3.56												
193	8	6.02												
194	2	0.75												
196	8	3.21												
196	10	4.9												
197	9	1.98											6	6
198	13	13.77												
小計	57	33.79											6	6
5号住居跡合計	293	184.32			1	1			1	37			82	122

表4：8号住居跡出土の植物遺体

LF No.	土壌サンプル量 (g)	浮遊物重量 (g)	イタジイ (g)	タブノキ (g)	シマサルナシ (g)	聖果類子葉 (g)	聖果類子葉? (g)	タブノキ? (g)	聖果類/タブノキ子葉 (g)	聖果皮 (?) (g)	不明 (g)	特定不可 (g)	合計 (g/片)	
204	10	11.52											7	7
205	8	4.06				1				1			7	2
206	5	1.92												
207	8	4.49											1	1
208	10	5.83											18	19
209	13	14.61												
8号住居跡合計	64	42.36			1					2			26	29

表5：11号住居跡出土の植物遺体

LP No.	土壌サンプル量 (g)	検出植物量 (g)	イタドリ (粒)	タブノキ (粒)	シマササゲ (粒)	庭栗種子 (粒)	庭栗種子殻 (g)	タブノキ (粒)	庭栗殻 (g)	庭栗種子 (粒)	不明 (粒)	測定不可 (粒)	合計 (粒/g)	
(北) 6	8	2.74											1	
(北) 7	7	6.62											3	
(北) 8	4	2.82									1		10	
(北) 49	7	5.38									3		13	
(北) 50	7	6.27						1					7	
(北) 51	7	2.35									1		12	
(北) 52	8	7.16								2			27	
(北) 53	8	4.02								1	4		32	
(北) 54	10	3.67									7		10	
(北) 55	6	2.31									3		14	
(北) 56	9	4.08											4	
(北) 57	8	4.65											5	
(北) 58	8	3.56											2	
(北) 59	7	2.06											4	
(北) 60	9	6.64		1	1						1		5	
(北) 61	7	7.34						1					3	
(北) 62	10	6.87						1					5	
(北) 63	6	2.23									2		13	
(北) 64	6	1.44											7	
(北) 65	8	1.27											4	
(北) 66	6	3.52						1					2	
(北) 67	2	0.87											4	
(北) 68	7	5.03											5	
(北) 69	8	4.51											3	
(北) 70	7	4.75								1			4	
(北) 71	9	3.84											2	
(北) 72	8	6.08											3	
(北) 73	5	1.8											4	
(北) 74	6	1.85											4	
小計	208	122.44		1	4		2	1	7		4	24	133	
(南) 10	9	26.18									2		2	
(南) 11	7	7.77											3	
(南) 12	8	15.17									1		2	
(南) 13	8	9.63							1				2	
(南) 14	8	16.98							1				3	
(南) 15	6	5.25											5	
(南) 16	7	3.81									1		4	
(南) 17	8	4.71											7	
(南) 18	6	1.53									5		2	
(南) 19	7	2.17									1		1	
(南) 20	8	22.14											3	
(南) 21	10	13.76						1			3		9	
(南) 22	8	5.38											7	
(南) 23	10	4.82									1		3	
(南) 24	5	3.83							1		6		2	
(南) 25	8	5.32									2		4	
(南) 26	7	8.59									1		11	
(南) 27	8	3.51									2		3	
(南) 28	5	3.94											3	
(南) 29	10	8.94									1		3	
(南) 30	8	3.66									3		1	
(南) 31	7	5.31									1		3	
(南) 32	8	2.26									2		2	
(南) 33	13	20.15						1					10	
(南) 34	8	3.27									3		6	
(南) 35	8	4.22									3		3	
(南) 36	6	5.12											6	
(南) 37	7	8.33									4		3	
(南) 38	8	5.92									16		15	
(南) 39	6	5.1									10		3	
(南) 40	8	5.35									2		19	
(南) 41	10	8.38									3		4	
(南) 42	7	3.97											10	
(南) 43	6	3.73											5	
(南) 44	7	3.52									4		8	
(南) 45	7	6.35						1					6	
(南) 46	8	4.05									2		3	
(南) 47	8	2.66									3		4	
(南) 48	9	2.92		1							3		4	
小計	303	277.81		1	1		1	4	2		14	96	12	
(西) 75	9	3.92											177	
(西) 76	8	2.14											308	
(西) 77	7	0.65									1		7	
(西) 78	9	4.47											8	
(西) 79	8	1.04									4		3	
(西) 80	10	2.48						3					2	
(西) 81	9	5.8											5	
(西) 82	10	2.52											2	
(西) 83	9	2.38									1		4	
(西) 84	9	2.78									2		4	
(西) 85	7	0.83											10	
(西) 86	5	0.96											9	
(西) 87	7	1.77									1		12	
(西) 88	10	3.84											5	
(西) 89	10	8.34									1		15	
(西) 90	9	1.23											17	
(西) 91	11	3.49											2	
小計	147	48.65				2	6	2			1	14	57	
11号住居跡合計	658	448.9		1	1		7	9	7	9	19	134	12	367

表6:12号住居跡出土の植物遺体

LF No. (層)	土壌サンプル量 (g)	浮遊体重量 (g)	イタドリ (点)	タブノキ (点)	シマサルナン (点)	堅果類子葉 (片)	堅果類子葉? (片)	タブノキ? (片)	堅果類/タブノキ葉 (片)	堅果皮(?) (片)	不明 (片)	同定不可 (片)	合計 (点/片)	
126	8	8.65												
127	7	9.74												
128	9	25.34										3	3	
129	8	21.74										2	2	
130	7	22.02										3	3	
131	9	17.43							1				1	
132	11	27.17										2	2	
147	9	9.28								2			3	
小計	68	139.37							1	2		8	11	
その他	133	7	10.65									2	2	
134	11	30.38										3	3	
135	8	16.57										5	5	
138	8	13.88										3	3	
137	9	21.39										2	2	
138	7	7.58												
139	7	14.19										2	2	
140	10	23.82												
141	5	7.22												
142	11	13.86										4	4	
144	8	9.4												
143	9	11.65										1	1	
146	5	9.54												
148	9	14.35												
149	10	19.82								1		4	5	
150	7	9.92										3	3	
151	9	12.18				2								
157	5	8.46								6			6	
158	7	15.54										3	3	
159	8	8.37				1				1		2	2	
160	9	10.18								1		2	2	
161	10	14.1										2	2	
162	8	9.42												
163	9	13.49										5	5	
164	6	7.58								2		5	5	
165	9	8.87				1						18	19	
166	5	6.23								1		5	7	
167	9	17.74										8	8	
168	7	9.04								5		7	12	
169	10	21.39										1	1	
170	7	11.17								1		11	12	
171	9	23.14								1		8	9	
172	5	9.03										9	9	
173	7	11.68				1		1		2	4	2	10	
174	8	6.54								4		4	8	
175	10	16.03												
176	10	15.16										4	4	
177	6	6.52												
178	5	10.43				1				1		10	12	
179	8	10.19								3		6	9	
180	6	12.35				1				5		10	16	
181	6	8.18										11	11	
182	9	19.57												
184	8	11.04								2		8	10	
185	5	7.06								2		14	16	
186	5	9.3				1						25	25	
187	5	6.88										9	12	
188	5	8.86				1	1			1		25	25	
189	4	8.18								5		4	9	
小計	373	607.01				9	1	1		1	45	4	228	289
152	6	10.31											7	7
153	5	10.68												
154	4	3.89										3	3	3
155	7	7.15				1						4	5	5
156	7	8.75										19	20	20
小計	32	40.66				1							19	20
12号住居跡合計	473	478.44				10	1	1		2	47	4	256	320

住吉貝塚出土の植物遺体



1) イタジイ 表面



イタジイ 側面



2) タブノキ 表面



タブノキ 内面



3) シマサルナシ



4) 堅果類子葉 表面



内面



側面



5) 堅果類子葉 表面



内面



側面



6) 堅果皮?表面



内面



7) 不明 1 a (側面)



不明 1 a (上面)



不明 1 b



8) 不明2



9) 不明3 表面



内面

第2節

知名町住吉貝塚出土の動物遺体

西中川 駿

1. はじめに

遺跡から出土する動物遺体は、当時の狩猟獣や食生活を再現するのに貴重な資料となっている。奄美諸島からの動物遺体の出土例は25遺跡を数え、出土動物も哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、甲殻類、棘皮類および貝類と多い。

沖永良部島からの動物遺体の出土は、これまで縄文早期の中甫洞穴や縄文後期の神野貝塚、それに縄文晩期の石原遺跡、住吉貝塚などがある。住吉貝塚は昭和32年に九学会連合により発掘調査され、林田によりイノシシの出土が報告されている。

今回調査を依頼された住吉貝塚は、知名町住吉にあり、畑地帯総合整備事業地区に隣接し、将来土地改良事業が同貝塚周辺に及ぶことが予想されることから、知名町教育委員会が平成13年～16年まで発掘調査を行った縄文晩期の遺跡である。動物遺体は発掘後、当方に持ち込まれたものであり（魚類、貝類は除く）、ここでは出土資料から動物種や出土量について、特に哺乳類遺体についてその概要を報告する。なお、完形骨についてはDrieschの方法に従い、ノギスを用いて計測を行った。

2. 出土動物種と出土量

住吉貝塚から出土した動物遺体は、哺乳類、鳥類、爬虫類および魚類（持ち込まれたものに混入）のもので、総重量7516.4gで、そのうち動物種と骨の種類が同定されたものは、6732.4gで、総重量の90%である。不明骨の殆どは哺乳類の細骨片である。同定された動物種と出土量は表1に示した。

まず、動物別出土量をみると、哺乳類が4338.2gで全体の64.4%を占め、次いで爬虫類の2339.2g（34.7%）であり、鳥類と魚類は極めて少ない。次にトレンチ別に出土量をみると、16トレンチが2180.8gで全体の32.4%で最も多く、次いで6トレンチの2132.9g（31.7%）、10トレンチ（927.3g）、4トレンチの順である。

同定され哺乳類遺体は、イノシシ、シカ、イヌ、ネズミ、イルカおよびクジラのものであり、イノシシの骨片が4128.7g（509骨片）で最も多く、全体の95.2%を占めている。他の動物は極めて少ない。爬虫類はウミガメのものであるが、鳥類のカラス、ミズナギドリや魚類のマグロ、カツオおよびタイ類のものは詳細な再検討を要する。

3. 遺構別（土坑、住居跡）出土状況

1) 2トレンチ（図版1の1～15参照）

第2トレンチからは、イノシシの頸椎、軸椎、肩甲骨、大腿骨、距骨など32点が検出され、ほぼ完全な左距骨の最大長と幅は29.3×16.52mmで、これは現生のリュウキュウイノシシとほぼ同じ大きさである。シカは本遺跡からただ1点の出土で、左側の角第2枝の部位で、分岐後の部位での幅と径は13.21と12.22mmである。イヌは右下顎骨1点で計測不能である。ネズミはケナガネズミ大の大きさの右大腿骨1点で、最大長39.39mmである。ウミガメは上腕骨、大腿骨、背甲など10点、魚類は鰓蓋骨など4点が検出されている。

2) 3トレンチ（図版1の16～21参照）

第3トレンチからは、イノシシの寛骨、大腿骨など10点が出土しているが、計測可能のものはない。鳥類は2点、ウミガメは緑甲など7点が検出されている。

3) 4トレンチ（図版1の22～35参照）

第4トレンチからは、イノシシの下顎骨、頭椎、胸椎、四肢骨など56点や鳥類の上腕骨、橈骨、尺骨などが6点検出されている。また、ウミガメの背甲、腹甲など8点が出土している。イノシシの大腿骨遠位端の幅と径は34.48×42.71mmで、第四指骨の最大長は28.68mmである。

4) 6トレンチ（図版1の36～49参照）

2号土坑からは、イノシシの尺骨、踵骨、基節骨など18点が出土し、また、ネズミの左大腿骨、ウミガメの背甲なども出土している。イノシシの右踵骨の最大長は77.75mmである。

3号住居跡からは、イノシシの尺骨、距骨、踵骨など20点やウミガメの烏口骨、背甲など10点が検出されている。イノシシの左距骨の最大長は32.42mmである。

4号住居跡からは、イノシシの大腿骨、脛骨の2点とウミガメの背甲1点が出土しているが、不完全な資料で計測は不可能である。

5号住居跡からは、イノシシの下顎骨、肩甲骨、上腕骨、踵骨、距骨など76点、ウミガメの上腕骨、烏口骨、腹甲や指骨など28点が検出され、また、魚類の鰓蓋骨も出土している。イノシシの左踵骨の最大長は70.10mmで、左距骨3点の最大長と幅は、それぞれ34.8×21.96mm、19.62×36.57mm、18.67×33.51mmである。

6トレンチのその他からは、イノシシの肩甲骨、脛骨、距骨など32点、鳥類の烏口骨、中手骨の2点、ウミガメの前烏口骨、背甲、腹甲など34点が出土している。イノシシの左脛骨遠位端の幅と径は25.47×23.89mmで、

左距骨の最大長と幅は33.66x19.11mmである。

5) 10トレンチ (図版IIの1~33参照)

6号住居跡からは、イノシシの胸椎、上腕骨、尺骨、大腿骨など22点、イヌの下顎骨1点、ネズミの左大腿骨2点、ウミガメの背甲、腹甲など7点が出土している。イノシシの上腕骨遠位端の幅と径は31.79x27.94mm、大腿骨のそれらは41.23x50.80mmである。イヌの左下顎第二臼歯の長さとは幅は17.03x7.66mmであり、これは現生の小型イヌの大きさである。ネズミの左大腿骨近位端の幅と径は9.19x4.41mmである。

7号住居跡からは、イノシシの脛骨、踵骨など5点の出土で、いずれも計測不可能な資料である。

8号住居跡からは、イノシシの下顎骨、上腕骨、腕骨、踵骨、距骨など35点とウミガメの背甲や指骨などが出土している。イノシシの右上腕骨遠位端幅と径は30.28x27.24mmで、左距骨2点の最大長と幅はそれぞれ34.89x19.06mm、33.85x19.10mmである。

9号住居跡からは、イノシシの大腿骨、第五中足骨など5点とウミガメの背甲1点が出土している。イノシシの左第五中足骨の最大長は46.30mmである。

10トレンチのその他からは、イノシシの下顎犬歯、上腕骨、距骨など21点、ウミガメの指骨6点、魚類の椎骨1点が出土している。イノシシの右上腕骨遠位端の幅と径は33.20x32.29mm、左距骨の最大長と幅は36.16x20.34mmである。

6) 15トレンチ (図版IIの34~41参照)

11号住居跡からは、イノシシの尺骨、第三、四中手骨など28点、ネズミの左大腿骨1点および鳥類2点、ウミガメの椎骨など4点が出土している。イノシシの右第三、四中手骨最大長はそれぞれ70.24、70.42mmである。

15トレンチのその他からは、イノシシの肩甲骨、尺骨など11点 (計測不可能)、鳥類の脛骨など2点およびウミガメの右大腿骨、指骨など5点が出土している。

7) 16トレンチ (図版IIの42~77参照)

12号住居跡からは、イノシシの頭蓋骨片、下顎骨、第一頰椎、上腕骨、第四中手骨、距骨など36点、ネズミの右大腿骨、魚類の背鰭およびウミガメの下顎骨、腹甲などが出土している。イノシシの左距骨の最大長と幅は32.31x18.24mmで、右第四中手骨の最大長は66.85mmである。

13号住居跡サブトレンチからは、イノシシの上、下顎骨片、上腕骨、尺骨など14点、イルカの椎骨1点、ウミガメの上腕骨、背甲など7点が出土している。ウミガメの右上腕骨2点の最大長は211.08mm、154.00mmで

ある。

14号住居跡サブトレンチからは、イノシシの寛骨、第四中足骨、第三指基節骨など11点、クジラの頭蓋骨片1点および鳥類の左上腕骨1点が出土している。イノシシの右第四中足骨最大長は83.89mmである。

16トレンチのその他からは、イノシシの下顎骨、上腕骨、第三中手骨、踵骨、第五中足骨など75点、イヌの左尺骨1点、ウミガメの鳥口骨、指骨など19点が出土している。イノシシの右第三中手骨最大長は63.18mmで、右第五中足骨のそれは56.77mmである。

4. 考 察

遺跡から出土する自然遺物は、当時の人々の狩猟や漁撈生活を知る手掛かりとして、また、動物地理学的観点から、当時のその地域における動物相を知る上にも非常に貴重な資料となっている。

琉球列島の一部をなす沖永良部島からの動物遺体の出土例は、縄文早期の中甫洞穴や後期の神野貝塚、晩期の石原遺跡と住吉貝塚にみられ、これらの遺跡からは、哺乳類、鳥類、爬虫類、魚類、甲殻類および貝類などの出土し、特に哺乳類では、イノシシ、イヌ、ネズミ、クジラなどが報告され、また、神野貝塚からはコウモリが検出されている。

今回調査した住吉貝塚から出土した動物遺体は、イノシシ、シカ、イヌ、ネズミ、イルカおよびクジラなどの哺乳類や大量の爬虫類のウミガメ、それに少量の鳥類、魚類の骨片であった。哺乳類ではイノシシが全体の65%を占め、陸生の哺乳類としてはイノシシをよく狩猟し、食していたことがうかがわれる。

一方、形態学的観点からイノシシをみると、各トレンチから出土したイノシシは本土のイノシシより小型で、奄美諸島に生息している現生のリュウキュウイノシシに良く似ていることから、これらの系統のイノシシであることが想像される。また、シカは奄美諸島ではウツタ遺跡や犬田布貝塚で出土しているが、本遺跡からも解体痕のある角1点を検出されている。しかし、いずれも1、2点の出土であり、また、奄美諸島には現在もシカは生息していないことから、恐らく当時の人々の交流によって持ち込まれたものであろう。イヌは中甫洞穴や神野貝塚からも出土しており、本遺跡のイヌも狩猟の伴侶や番犬として飼われていたことが考えられる。体高は40cm以下で現生の柴犬と同じ小型犬である。ネズミの出土は奄美の遺跡の一つの特徴であるが、大きさはケナガネズミ大であり、これらを食料にしていたかはわからない。

動物遺体の出土状況みると、いわゆる捨て場でなく、多くが生活の場である住居跡またはその周辺からの出土であり、食料の残滓を居住地に近接して捨てていることが本遺跡の特徴的である。

当時の奄美諸島の哺乳動物相は、県本土でみられるサル、ノウサギ、タヌキ、アナグマなどは検出されておらず、これまでの出土資料から小型のイノシシや、ネズミ、それにアマミノクロウサギやジュゴンなどが検出されていることから、トカラ海峡（渡瀬ライン）を境に北と南で相物相が異なっていたことが想像される。

以上、住吉貝塚を遺した人々は、動物蛋白源として陸ではイノシシを狩猟し、海辺では魚介類やウミガメを採集して食膳を賑わせていたことが想像される。

5. まとめ

知名町の住吉貝塚（縄文晩期）から出土した動物遺体、特に哺乳類遺体について調査したので、その概要を報告する。

1. 動物遺体は2~4, 6, 10, 15, 16トレンチの土坑や住居跡から出土し、それらは哺乳類、鳥類、爬虫類および魚類のもので、哺乳類が最も多く全体の64.4%を占め、次いで爬虫類が多く、鳥類は極めて少ない。魚類は別途報告のため本資料では少量である。

2. 哺乳類はイノシシ、シカ、イヌ、ネズミ、イルカおよびクジラのものであり、哺乳類ではイノシシが最も多く全体の95.2%を占め、他のものは極めて少ない。鳥類は再検討を要するが、カラスやミズナグドリのもと思われ、爬虫類はアカウミガメ、アオウミガメのものである。

3. イノシシは小型でリュウキュウイノシシに似ており、シカの角1点は奄美に生息の史実がないことから交流で持ち込まれたものであろう。イヌは小型で現生の柴イヌ大の大きさで、ネズミはケナガネズミ大の大きさである。

参考文献

1. Dreisch, A: A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Pub. Peabody Museum, Harvard Univ., USA, pp. 1-137 (1976)
2. 長谷部言人: 出水貝塚貝殻、獣骨及び人骨. 京都大学部考古学研究室報告, 6: 13-27 (1921)
3. 今泉吉典: 原色日本哺乳類図鑑. pp. 1-196 保育社, 東京, (1979)
4. 鹿児島県教育委員会: 鹿児島県市町村別遺跡地名表. pp. 1-175 (1977)
5. 金子浩晶: 縄文時代の狩猟, 漁撈. 歴史公論, 2, 67-71 (1979)
6. 九州連合奄美共同調査委員会編: 奄美の自然と文化, pp.196-274 (1959)
7. 甲元真之編: 環東中国海沿岸地域の先史文化. 2, 70~151(1999)
8. 西田正規: 縄文時代の食料資源と生業活動. 季刊人類学, 11, (3) 3-41 (1980)
9. 西中川 駿他: 九州の縄文遺跡出土の哺乳類遺体. 鹿児島考古, 38, 53-64(2004)
10. 西中川 駿他: 鹿児島県の縄文, 弥生遺跡出土の自然遺物—特に動物遺体について—. 鹿児島考古, 33, 1-13 (1999)
11. 西中川 駿: 神野貝塚出土の自然遺物—特に出土動物骨について—. 鹿児島考古, 2, 45-50 (1984)
12. 西中川 駿他: 中甫洞穴出土の動物骨, 鹿児島考古, 17, 41-44 (1983)
13. 山崎京美: 遺跡出土の動物遺存体に関する基礎的研究. 平成7年度~8年度科学研究補助金, 研究成果報告書, pp.185~211 (1998)

(放送大学鹿児島学習センター)

表1 住吉貝塚出土の動物種と出土量

動物種 トレンチ	哺乳類					鳥類	爬虫類	魚類	トレンチ別 出土量	
	イノシシ	シカ	イヌ	ネズミ	イルカ クジラ					
2 T	258.4 32	35.4 1	5.2 1	1.1 1			137.4 10	21.5 4	459 49	
3 T	128.9 10					3.2 2	42.3 7		174.4 19	
4 T	483.8 56					9.1 6	73.6 8		566.5 70	
6 T	2号土坑 18 3号住居 94.3 20 4号住居 25.4 2 5号住居 675.3 76 その他 258.8 32			0.3 1			25.8 2 60.9 10 5.6 1 430.9 28 357.4 34	13.3 1	208.6 21 155.2 30 31 3 1119.5 105 618.6 69	
10 T	6号住居 233.9 22 7号住居 35.1 5 8号住居 276.6 35 9号住居 38.7 5 その他 159.4 21		16.2 1	1.1 2			85.8 7 50.2 9 14.1 1 15.6 6		337 32 35.1 5 326.8 44 52.8 6 175.6 28	
15 T	11号住居 124.7 28 その他 100.9 11			0.4 1		1.3 2 1.5 2	5.4 4 55.3 5		131.8 35 157.7 18	
16 T	12号住居 379.3 36 13号サブ 54.1 14 14号サブ 32.3 11 その他 586.3 75			0.9 1	43.9 1	101.9 1	307.6 36 378.1 7 293.2 19	1.6 1	689.4 65 476.1 22 134.7 13 882.6 95	
動物別出土量	4128.7 509	35.4 1	24.5 3	3.8 6	43.9 1	101.9 1	18.3 16	2339.2 185	36.7 7	6732.4 729

図版の説明

図版 I

2トレンチ

1~9: イノシシ; 1. 第一頸椎 2. 第二頸椎 3. 左肩甲骨 4. 右上腕骨 5. 左寛骨 6. 右大腿骨 7. 左距骨 8. 右第四中手骨 9. 右第五中手骨 10. シカ, 左側角イヌ; 11. 右下顎骨 ネズミ; 12. 右大腿骨 ウミガメ; 13. 背甲 14. 指骨 魚類; 15. 鰐蓋骨

3トレンチ

16~21: イノシシ; 16. 左寛骨 17. 右大腿骨 18. 左大腿骨 19. 左第五中手骨 ウミガメ; 20. 21. 緑甲

4トレンチ

22~31: イノシシ; 22. 左下顎骨 23. 24. 第五, 六頸椎 25. 胸椎 26. 左肋骨 27. 左肩甲骨 28. 右尺骨 29. 左寛骨 30. 右第四指基節骨 31. 右大腿骨 鳥類; 32~34. ウミガメ; 35. 腹甲

6トレンチ

2号土坑 (36~39): イノシシ; 36. 左尺骨 37. 右踵骨 38. 右第三中足骨 39. 左第三指基節骨 ネズミ; 40. 左上腕骨

3号住居 (41~46): イノシシ; 41. 左寛骨 42. 右尺骨 43. 左距骨 44. 右踵骨 45. 左第四趾基節骨 46. 右第四趾基節骨

4号住居 (47~49): イノシシ; 47. 右大腿骨 48. 右脛骨 ウミガメ; 49. 背甲

5号住居 (50~67): イノシシ; 50. 左上顎骨 51. 右下顎骨 52. 左下顎犬歯 53. 右肩甲骨 54. 左上腕骨 55. 左寛骨 56. 左脛骨 57. 左距骨 58. 左距骨 59. 左踵骨 60. 左距骨 60'. 左第三, 四中足骨 ウミガメ; 61. 左上腕骨 62. 左上腕骨 63. 右前烏口骨 64. 腹甲 65. 66. 指骨 魚類; 67. 鰐蓋骨

6トレンチその他 (68~74): イノシシ; 68. 右肩甲骨 69. 左脛骨 70. 左距骨 71. 第三趾末節骨 鳥類; 72. 烏口骨 73. 中手骨 74. 前烏口骨

図版 II

10トレンチ

6号住居 (1~11): イノシシ; 1. 胸椎 2. 左上腕骨 3. 左尺骨 4. 右大腿骨 イヌ; 5. 左下顎骨 ネズミ; 6. 7. 左大腿骨 ウミガメ; 8. 烏口骨 10. 頭蓋骨

7号住居 (10, 11): イノシシ; 10. 右脛骨 11. 右踵骨

8号住居 (12~22): イノシシ; 12の上, 左下顎骨 下, 右寛骨 13. 右上腕骨 14. 左橈骨 15. 16. 左踵骨 17. 18. 左距骨 19. 左第四趾基節骨 20. 左第四趾末節骨 ウミガメ; 21. 背甲 22. 指骨

9号住居 (23~25): イノシシ; 23. 左大腿骨 24. 左第四指中手骨 ウミガメ; 背甲

10トレンチのその他 (26~33): イノシシ; 26. 右下顎犬歯 27. 左下顎犬歯 28. 右上腕骨 29. 左距骨 鳥類; 30. 脛骨 ウミガメ; 31. 32. 指骨 魚類; 33. 椎骨

15トレンチ

11号住居 (34~36): イノシシ; 34. 右第四中手骨 35. 右第三中手骨 36. 右尺骨 36'. 右第二中手骨 ネズミ; 36". 左大腿骨

15トレンチのその他 (37~41): イノシシ; 37. 左肩甲骨 38. 左尺骨 ウミガメ; 39. 40. 上腕骨 41. 指骨

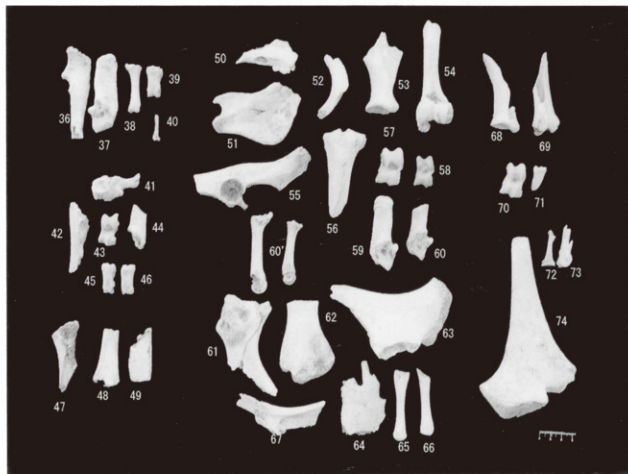
16トレンチ

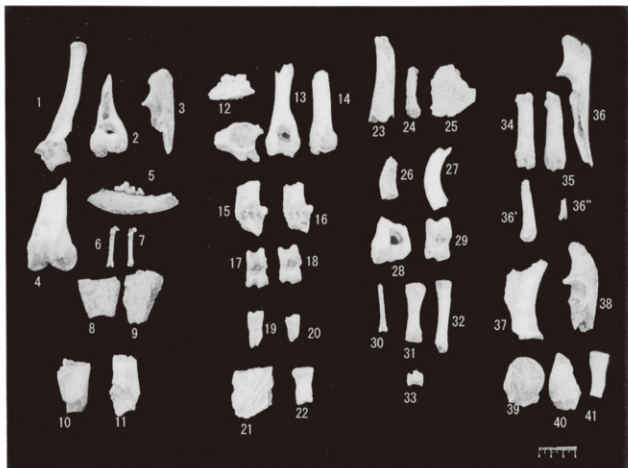
12号住居 (42~56): イノシシ; 42. 前頭骨 43. 左側頭骨 44. 左下顎骨 45. 第二頸椎 46. 第七頸椎 47. 右上腕骨 48. 左距骨 49. 左踵骨 50. 左第四中手骨 51. 右第四中足骨 ネズミ; 52. 右大腿骨 魚類; 53. 背鰭 ウミガメ; 54. 頭蓋骨 55. 下顎骨 56. 背甲

13号住居サブ (57~64): イノシシ; 57. 左上顎骨 58. 59. 左下顎骨 60. 61. 左上腕骨 イルカ; 62. 椎骨 ウミガメ; 63. 64. 右上腕骨

14号住居サブ (65~68): イノシシ; 65. 右寛骨 66. 左第四中手骨 67. 右第四指基節骨 クジラ; 68. 頭蓋骨

16トレンチのその他 (69~78): イノシシ; 69. 左下顎骨 70. 右上腕骨 71. 左踵骨 72. 右第三中手骨 73. 右第五中足骨 74. 右第四指基節骨 イヌ; 75. 左尺骨 鳥類; 左, 上腕骨 ウミガメ; 77. 前烏口骨 78. 左大腿骨.





第3節

魚類遺体群からみた住吉貝塚の 特徴と重要性

榎泉岳二（早稲田大学）

はじめに

鹿児島県知事町住吉貝塚は、沖永良部島西海岸に面した隆起サンゴ礁段丘上に立地する沖縄貝塚時代前期～中期（縄文時代後期～晩期）中心の集落遺跡である。本遺跡では2001年～2004年に知事町教育委員会によって実施された発掘調査において、多数の堅穴住居跡の覆土および包含層から多数の骨類が出土した。堅穴住居跡の大半は貝塚時代中期の所産だが、一部は前期まで遡る可能性がある。ここでは、上記の調査において採集された骨類のうち魚骨の分析結果について報告する。

1. 分析資料

今回分析した骨類には、発掘現場において手で拾い上げられた資料（以下「現地採集資料」）と、遺構覆土のサンプルを水洗選別して採集された資料（以下「水洗資料」）の2種類がある。前者は発掘の際にも目につきやすい比較的大型の魚骨、後者は発掘現場において肉眼で見つけにくい小型の魚骨が主体である。

水洗資料については、2004年調査において6号・9号・13号・14号の各住居跡から覆土のサンプルを採集した。各サンプルは約30cm角（14号住居跡は約25cm角）の柱状とし、これを5cm間隔で水平に分割しながら採取した（詳細は表1を参照）。篩別に使用したメッシュは4mm、2mm、1mmの3種類である。今回は時間の制約のため、各遺構のサンプルから一部を選び同定した（表1・表2）。また、その他の住居跡においても覆土の水洗選別（1mmメッシュ使用）が行われており、これらのうち表6に示した5つの住居跡からの採集資料について、概要を観察した。

現地採集資料は13の遺構の覆土および遺構外（包含層）から採集されている。今回は、住居跡については8軒分を同定し、また3軒の住居跡と2箇所の包含層資料について概要を観察した（表3）。またベラ科咽頭骨とアエナキダイ科前上顎骨については包含層資料を総覧し、抽出・同定した。

2. 分析方法

同定対象とした部位は、主上顎骨、前上顎骨、歯骨、角骨、方骨、椎骨の全標本（これらは同定未了の資料もすべてデータ化した）のほか、分類群ごとの骨格の特徴に応じてできるだけ多くの部位を対象とするよう

努めた。同定方法は現生標本との比較を原則とした。比較に用いた現生標本は、筆者の所蔵標本のほか、国立歴史民俗博物館西本豊弘氏、小林園子氏の所蔵標本も参照させていただいた。同定結果で「未同定」としたものは、比較標本中に該当するものが見いだせなかったもの、「同定不可」としたものは、破損などのため分類群の特定が明らかに困難なものである。なお椎骨の同定に関しては基礎研究がきわめて不十分なため、特徴の明確なもののみを同定し、その他は「保留」とした。

3. 分析結果

(1) 魚骨の包含密度

現地採集資料・水洗資料ともに、多数の魚骨が得られた。これまでに堆積物中における魚骨の包含密度（堆積物100ccあたりの魚骨同定対象部位数）が知られている遺跡と比較すると（図1）、貝塚時代後期の奄美大島用見崎遺跡が¹⁾4.8、沖縄伊江島のナガラ原東貝塚が7.4と比較的高い値を示しているが、本遺跡では53.9と、これをはるかに上回る値が得られた。年代の違いや堆積物の性状の違い（用見崎・ナガラ原東とともに砂丘遺跡の包含層）もあるので単純には比較できないが、魚骨（とくに小型魚骨）の多産が本遺跡の特徴であることは明らかである。

(2) 標本の記載

板鰓類3分類群、真骨類41分類群が同定された（表4）。以下、主要種および同定に関して注釈を要する分類群について記載する。

サメ類：水洗資料からメジロサメ科かと思われる歯が2点得られたほか、サメ類の椎骨も普通である。椎骨の大半はメジロサメ型だが、横径10mm～30mmと大きささまざま、形態や弓溝内部の隔壁の有無などに差異があり、複数種が混在する可能性が高い。また水洗資料の13号住居跡²⁾から検出された椎骨は星状構造をもち、明らかに別種である。

ニシン科：水洗資料から腹椎・尾椎が若干得られた。種の査定は困難だが、いずれもごく小型でマイワシ・サッパに近似する。ニシン亜科（おそらくミズン類）と思われる。

ウナギ属：水洗資料から腹椎が若干得られた。神経弓門がトンネル状を成す点や椎体側面の独特の網目状紋様などによってウツボ科・アナゴ科と区別できる。

ウツボ科：前上顎骨-篩骨-前鋤骨板（表では前鋤骨板と略記）、主上顎骨、歯骨には2タイプがみられた。ウツボ科Aとしたものは一般的なウツボ科の形態だが、Bとした歯骨は歯が面的に密生する。

トビウオ科：水洗資料から椎骨が普通に検出されている。腹椎は頸突起が前方下に伸びる点、腹面中央を

表1. 住吉貝塚堆積物サンプルのリスト. [分析] 欄の「全」は全量分析, 「1/2」は半量分析

トフ	遺構	ワグ No.	サイズcm		体積cc		重量g			分析
			平面	厚さ	焼成時	採集後	水洗前	水洗後*	4mm 2mm 1mm	
10T	6号住居	①	30 × 30 ×	5	4500±	7800	7900	928		
10T	6号住居	②	30 × 30 ×	5	4500	7900	7500	1134	全	
10T	6号住居	③	30 × 30 ×	5	4500	7500	7800	1417		
10T	6号住居	④	30 × 30 ×	5	4500±	7800	8000	643	全	全 1/2
10T	6号住居	⑤	30 × 30 ×	5	4500±	8300	8300	405		
10T	6号住居	⑥	30 × 30 ×	-	-	4800	4500	260		
10T	9号住居 (ワグトフ)	①	30 × 30 ×	6	5400	8700	8700	465		
10T	9号住居 (ワグトフ)	②	30 × 30 ×	5	4500	8000	7900	522		
10T	9号住居 (ワグトフ)	③	30 × 32 ×	5	4800	7800	7500	559	全	全 1/2
10T	9号住居 (ワグトフ)	④	30 × 32 ×	5	4800	7200	6700	341		
10T	9号住居 (ワグトフ)	⑤	30 × 32 ×	-	1920±	3000	2700	110		
16T	13号住居	①	30 × 30 ×	5	4500	8000	7900	401	全	
16T	13号住居	②	30 × 30 ×	5	4500±	6500	7000	294		
16T	13号住居	③	30 × 30 ×	5	4500	7700	7700	492		
16T	13号住居	④	30 × 31 ×	5	4650	8000	8100	823	全	全 1/2
16T	13号住居	⑤	30 × 32 ×	5.5	5280±	7200	8100	1427		
16T	13号住居	⑥	30 × 32 ×	4.5	4320	6800	7000	1181		
16T	13号住居	⑦	30 × 32 ×	5	4800	7500	8000	1438	全	
16T	13号住居	⑧	30 × 32 ×	5	4800±	7500	7800	1215		
16T	14号住居 (ワグトフ)	①	25 × 25 ×	5	3125	5500	5700	312		
16T	14号住居 (ワグトフ)	②	25 × 26 ×	5	3250	5200	5200	373	全	
16T	14号住居 (ワグトフ)	③	25 × 26 ×	5	3250	5000	5300	336		
16T	14号住居 (ワグトフ)	④	25 × 25 ×	5	3125	5500	5800	426		
16T	14号住居 (ワグトフ)	⑤	25 × 25 ×	5	3125	5200	5600	451	全	全 1/2
16T	14号住居 (ワグトフ)	⑥	25 × 25 ×	5	3125	5200	5400	557		
16T	14号住居 (ワグトフ)	⑦	25 × 25 ×	5	3125	5500	5800	549		
16T	14号住居 (ワグトフ)	⑧	25 × 25 ×	5	3125±	5800	5500	397		

*水洗後重量は風袋込みのため、実際の重量より若干重い値となっている (表2参照)。

表2. 住吉貝塚の堆積物サンプルから検出された骨類の重量. +はごく微量, 2mm魚骨重量は測定部位のみ, 「未」は未分析

トフ	遺構	ワグ No.	水洗後重量g					獣骨		魚骨		備考
			4mm	2mm	1mm	合計A	合計B*	4mm	2mm			
10T	6号住居	②	785	101	228	1114	1134	+	33.25	未		
10T	6号住居	④	399	75	155	629	643	4.85	7.00	1.00	1mmの魚骨は半量分析	
10T	9号住居 (ワグトフ)	⑤	359	80	103	542	559	-	19.70	2.25	1mmの魚骨は半量分析	
16T	13号住居	①	171	79	104	354	401	4.50	32.50	未		
16T	13号住居	④	605	91	110	806	823	38.50	16.30	3.40	1mmの魚骨は半量分析	
16T	13号住居	⑦	1122	134	162	1418	1438	64.45	37.55	未		
16T	14号住居 (ワグトフ)	②	263	60	38	361	373	4.00	21.15	未		
16T	14号住居 (ワグトフ)	⑥	243	77	113	433	451	27.35	20.05	2.05	1mmの魚骨は半量分析	

*合計Bは風袋込み (表1と同じ)。

薄く明確な隆起線が縦走する点などによって近縁のダツ科, サヨリ科と判別できる。

イトウダイ亜科: 現地採集資料からイトウダイ亜科に特有の顕著な棘をもつ前脚蓋骨 (名島弥生氏のご教示による) が得られた。また水洗資料からもイトウダイ科の歯骨・角骨・方骨が検出されている。

ハタ科: 前上顎骨と歯骨に2型がみられ, マハタ属に一般的な形態のものをマハタ型, スジアラに近似するものをスジアラ型とした (スジアラに関しては名島氏からご教示を賜り, 西本氏・小林氏の所蔵標本で確認させていただいた)。前者の歯骨は基本的に粗い絨毛

状歯からなるのに対し, 後者は類側に大型歯列が1列あり, 歯骨では先端歯と側歯帯の間に間隙がある。スジアラ型はいずれも比較的大型である。マハタ型は大小が混在しているが, 主体となるのは小型の個体で, 水洗資料の大半は4mmメッシュを通過し, 2mmまたは1mmメッシュで回収されている。その他の部位はハタ科として一括したが, 多くの部位で上記2タイプに対応すると思われる形態差がみられた。なお, 第1椎骨以外の椎骨はフエダイ科などの判別が確実でないため「ハタ型」としたが, ほとんどはハタ科と思われる。

表3. 住吉貝塚の現地採集（ピックアップ）資料リスト

Nof	遺物	分析
(4T)	1号住居	済
(6T)	2号土坑	済
(6T)	3号住居	未
(6T)	4号住居	概要を調査
(6T)	5号住居	済
(10T)	6号住居	済
(10T)	7号住居	未
(10T)	8号住居	概要を調査
(10T)	9号住居	済
(15T)	11号住居	済
(16T)	12号住居	概要を調査
(16T)	13号住居	済
(16T)	14号住居	済
2T	包含層	未*
3T	包含層	未*
4T	包含層	概要を調査
6T	包含層	未*
10T	包含層	未*
15T	包含層	未*
16T	包含層	概要を調査

*フエフキダイ科・ヘラ科は包含層資料のすべてを分析した。

表4. 住吉貝塚で採集された魚類遺体の種名一覧

魚骨魚鱗 (板鱗部類)	Chondrichthyes (Elasmobranchii)
サメ類 (メジロサメ科?)	Chondrichthidae?
サメ類 (その他)	Galeocerdo?
トビエイ科	Myliobatidae
硬骨魚類 (以骨類)	Osteichthyes (Teleostei)
ニシン科 (ニシン産物?)	Clupeidae (Clupeinae?)
ウツボ科	Arguillidae
ウツボ科A	Muraenidae A
ウツボ科B	Muraenidae B
アナゴ科	Congridae
ダシ科	Belontiidae
サヨリ科?	Hemirhamphidae?
トビウオ科	Exocoetidae
イソトウダイ科	Heterostomidae
カマス属	Sphyraenidae
ハタ科 (マハタ型)	Serranidae cf. <i>Epinephelus</i>
ハタ科 (スジアラ型)	Serranidae cf. <i>Plectropomus leopardus</i>
ギンガメアジ属	Caracidae
アジ科 (小強種)	Carangidae, gen. et sp. indet.
ヒシツ科	Mullidae
フエダイ科	Lutjanidae
コショウダイ類	<i>Plectorhynchus / Diagramma pictum</i>
クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i>
ヨコシマクロダイ	<i>Momotus grandoculis</i>
フエフキダイ属 (ハマフエフキ等)	<i>Lethrinus cf. L. nebulosus</i>
フエフキダイ属 (アマミフエフキ型)	<i>Lethrinus cf. L. miniatius</i>
チョウチョウウオ科	Chaetodontidae
イシダイ属	<i>Opisognathus</i>
スズメダイ科?	Pomacentridae?
ベラ科 (「コブダイ」型)	Labridae cf. " <i>Semicossyphus reticulatus</i> "
ベラ科 (「タキベラ」型)	Labridae cf. " <i>Bodianus perditio</i> "
ベラ科A	Labridae A
ベラ科B	Labridae B
ベラ科 (その他)	Labridae (others)
ブリコ属	<i>Calotomus</i>
イロブダイ属	<i>Bolboitespon</i>
アオブダイ属 (複数種)	<i>Scaurus</i> spp.
ソウダゴシオ属	<i>Astis</i>
スズメ	<i>Euthynnus affinis?</i>
マダコ類似種	<i>Scombridae, gen. et sp. indet.</i>
ニサダイ科 (板数種)	<i>Acanthuridae</i> spp.
アイゴ属	<i>Siganus</i>
オニオコゼ科?	<i>Syngnathidae?</i>
カレイ目	<i>Pleuronectiformes</i>
モンガラカワハギ科	<i>Balitoridae</i>
ハコブダイ科?	<i>Ostraciidae?</i>
ハリセンボン属	<i>Diodon</i>

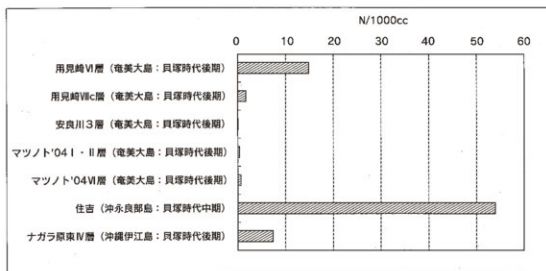


図1. 住吉貝塚と奄美・沖縄の遺跡の魚骨包含率の比較。値は埋蔵物1000ccあたりの魚骨数 (測定対象部位のみ)

表5. 住吉貝塚2004年調査で採集した堆積物サンプルから検出された魚類遺体（一部） 左右のある部位は左/右で表示

種類	部位	6号住居跡				9号住居跡			13号住居跡
		㊸		㊹		㊺			㊻
		4mm	4mm	2mm	1mm	4mm	2mm	1mm	4mm
サメ類	歯							1	
サメ類	椎骨		2					1	
板鰓類	椎骨								
ニシン科	椎椎				1				
ニシン科	尾椎								
ウナギ属	椎椎					1			
アナゴ科	椎椎								
ウツボ科	角骨								
ウツボ科	椎骨		2	1		3	9	2	
サヨリ科?	腹椎						1		
ダツ科	方骨								
ダツ科	腹椎					22			
ダツ科	尾椎								
トビウオ科	腹椎			1					
トビウオ科?	尾椎	1						4	
イトットウダイ科	歯骨								
イトットウダイ科	角骨								
イトットウダイ科	方骨								
カマス属	歯骨						/ 1		
カマス属	腹椎						2		
ハタ科 (マハタ型)	前上顎骨			/ 1			/ 1	1 /	
ハタ科 (マハタ型)	歯骨								
ハタ科	主上顎骨			/ 1					
ハタ科	前上顎骨								
ハタ科	角骨				1 /				
ハタ科	方骨	1 /	1 /					/ 1	
ハタ科	前脛蓋骨	/ 1							
ハタ科	主脛蓋骨				1 /	/ 1			
ハタ科	側頭骨	1 / 1			1 /			/ 2	
ハタ科	第1椎骨					1			
ハタ型	腹椎			4	1		1		
ハタ型	尾椎	1		1		2	1	1	
アジ科 (小型種)?	第1椎骨							1	
アジ科 (小型種)	腹椎								
ヒメジ科	歯骨								
ヒメジ科	角骨	1 /							
フエダイ科	主上顎骨								
フエダイ科	前上顎骨	1 /							
フエダイ科	歯骨	/ 1							
フエダイ科	角骨	/ 2							
フエダイ科	方骨	/ 1							
フエダイ科	前脛蓋骨								
コショウダイ類	歯骨								
フエフキダイ属	前上顎骨	/ 1	/ 1						
フエフキダイ属	方骨	/ 1						1 /	
フエフキダイ属	口蓋骨	1 /				/ 1		1 /	
フエフキダイ科	主上顎骨		/ 1						
フエフキダイ科	歯骨								
フエフキダイ科	角骨								
フエフキダイ科?	方骨								
フエフキダイ科	第1椎骨	1							
フエフキダイ科	腹椎	1							
タイ型	腹椎								
タイ型	尾椎	1							
チヨウチョウウオ科	腹椎				1				
スズメダイ科?	歯骨					/ 1			
ベラ科A	上顎蓋骨					/ 1			
ベラ科 (その他)	上顎蓋骨							/ 1	
ベラ科 (その他)	下顎蓋骨								
ベラ科 (型不明)	上顎蓋骨					1			
ベラ科 (型不明)	下顎蓋骨		1						

(次ページにつづく)

表5 (つづき)

種類	部位	6号住居跡				9号住居跡			13号住居跡
		②		④		③			①
		4mm	4mm	2mm	1mm	4mm	2mm	1mm	4mm
ペラ科	前上顎骨								
ペラ科	角骨								
ペラ科	方骨								
ペラ科	第1椎骨						1		
ペラ科	腹椎		1	3				1	
ペラ科	尾椎			1					
ブダイ属	上顎頤骨					/ 1			
ブダイ属	下顎頤骨							1	
ブダイ属	前上顎骨					1 /	/ 1		
イロブダイ属	前上顎骨								
アオブダイ属	上顎頤骨	/ 2				/ 1		/ 1	
アオブダイ属	下顎頤骨	1					1	1	
アオブダイ属	前上顎骨							/ 1	
アオブダイ属	歯骨					1 /		2 /	
ブダイ科	主上顎骨	1 / 1							
ブダイ科	前上顎骨					1 /			
ブダイ科	角骨	2 /							
ブダイ科	方骨	/ 2							
ブダイ科	主篩蓋骨								
ブダイ科	第1椎骨	1							
ブダイ科	腹椎	1	4			1		6	
ブダイ科?	尾椎	1		1		1	2	3	
ソウダガツオ属	尾椎								
ニサダイ科?	前上顎骨?						/ 1		
ニサダイ科	方骨			1 /					
ニサダイ科	舌顎骨						/ 1		
ニサダイ科?	主篩蓋骨	/ 1		/ 1			/ 1		
ニサダイ科	頬楯骨	1 /						1 /	
ニサダイ科	第1椎骨						1		
ニサダイ科	腹椎	1		2			3	2	
ニサダイ科	尾椎	8	1	3		3	5	12	
ニサダイ科	楯骨	1							
アイゴ属?	前歯骨								
アイゴ属	前上顎骨			1 /					
アイゴ属	方骨								
アイゴ属	第1椎骨						1	1	
アイゴ属	腹椎		1	1			1	1	
アイゴ属	尾椎								
オニオコゼ科?	腹椎							1	
カレイ目	尾椎					1	3		
モンガラカワハギ科	前上顎骨								
モンガラカワハギ科	舌顎骨								
モンガラカワハギ科	第1椎骨	1							
モンガラカワハギ科	腹椎			1					
モンガラカワハギ科	背楯板								
モンガラカワハギ科	鱗			5			3	2	
ハコフグ科?	楯板	1	2	1			4	3	
ハリセンボン属	鱗	5				1			
真骨類・未同定	主上顎骨			/ 1					
真骨類・未同定	歯骨								
真骨類・未同定	前上顎骨/歯骨								
真骨類・未同定	角骨					/ 1			
真骨類・未同定	方骨					/ 1	/ 1		
真骨類・未同定	主篩蓋骨								
真骨類・未同定	第1椎骨			1			2		
真骨類・未同定	腹椎					1			
真骨類・未同定	尾椎			1			6		
真骨類・保留	主篩蓋骨			1 / 2			3		
真骨類・保留	地骨	8	1	20	7		40	28	
真骨類・同定不可	前上顎骨					/ 1			
真骨類・同定不可	舌顎骨								
真骨類・同定不可	方骨						1		
真骨類・同定不可	椎骨	2			2	3	12	13	
標本数合計		59	16	60	14	50	112	54	61

(次ページにつづく)

表5 (つづき)

種類	部位	13号住居跡				14号住居跡			
		㊸		㊹		㊺	㊻		
		4mm	2mm	1mm	4mm	4mm	4mm	2mm	1mm
サメ類	骨		1						
サメ類	椎骨					1			
板類	椎骨	1	1						
ニシソウ科	鹿椎								
ニシソウ科	鹿椎			1					2
ウナギ属	腹椎							2	
アナゴ科	腹椎		1						
ウツボ科	角骨			1 /					
ウツボ科	椎骨	1	5		1	5	1	4	
サヨリ科?	腹椎								
ダツ科	方骨							/ 1	
ダツ科	鹿椎		1		1			3	
ダツ科	尾椎	1							
トビウオ科	腹椎	3	3		3			3	
トビウオ科?	鹿椎				2		1		
イトウダイ科	骨管	/ 1							
イトウダイ科	角骨							/ 1	
イトウダイ科	方骨	1 /							
カマス属	骨管								
カマス属	腹椎						3		
ハタ科 (マハタ型)	頭上顎骨		/ 1	1 / 1	/ 1				
ハタ科 (マハタ型)	重骨	/ 1	2 / 1					1 / 1	
ハタ科	主上顎骨			1 /				/ 1	
ハタ科	前上顎骨							1 /	
ハタ科	角骨		1 /			/ 1			
ハタ科	方骨		1 /		1 /			/ 1	
ハタ科	前鰓蓋骨						/ 1		
ハタ科	主鰓蓋骨		1 /		/ 1			/ 1	
ハタ科	鰓蓋骨		1 /		/ 1	1 /			
ハタ科	第1椎骨		2	1				1	
ハタ型	腹椎		2			2			
ハタ型	尾椎	1	1		1			2	
アジ科 (小型種)?	第1椎骨								
アジ科 (小型種)	腹椎				1				
ヒメジ科	重骨		/ 1						
ヒメジ科	角骨	1 /				/ 1	/ 1		
フエダイ科	主上顎骨		1 /		1 /				
フエダイ科	前上顎骨	/ 1							
フエダイ科	重骨	/ 1							
フエダイ科	角骨	1 /							
フエダイ科	方骨								
フエダイ科	前鰓蓋骨				1 /				
コショウダイ属	重骨	/ 1							
フエフキダイ属	頭上顎骨				1 /				
フエフキダイ属	方骨				1 /				
フエフキダイ属	口蓋骨						1 /		
フエフキダイ科	主上顎骨								
フエフキダイ科	重骨				1 /				
フエフキダイ科	角骨				1 / 1				
フエフキダイ科?	方骨						/ 1		
フエフキダイ科	第1椎骨								
フエフキダイ科	腹椎				1				
タイ型	鹿椎	1							
タイ型	尾椎	1					1		
チョウチョウウオ科	腹椎								
スズメダイ科?	重骨								
ペラ科A	上顎前骨								
ペラ科 (その他)	上顎前骨								
ペラ科 (その他)	下顎前骨				1				
ペラ科 (型不明)	上顎前骨								
ペラ科 (型不明)	下顎前骨							1	

(次ページにつづく)

表5 (つづき)

種類	部位	13号住居跡				14号住居跡			
		㊸		㊹		㊺	㊻		
		4mm	2mm	1mm	4mm	4mm	2mm	1mm	
ペウ科	前上顎骨				1 /				
ペウ科	角骨			/ 1			1 /		
ペウ科	方骨						/ 1		
ペウ科	第1椎骨			2					
ペウ科	腹椎								
ペウ科	尾椎								
ブダイ属	上顎頭骨					1			
ブダイ属	下顎頭骨								
ブダイ属	前上顎骨								
イロブダイ属	前上顎骨				1 /				
アオブダイ属	上顎頭骨		/ 1		1 / 2	/ 2	/ 1		
アオブダイ属	下顎頭骨	1			1	1			
アオブダイ属	前上顎骨			1 /	/ 1	/ 1			
アオブダイ属	歯骨	1 / 1	1 /		1 / 1	1 /	/ 1		
ブダイ科	主上顎骨	1 /				1 /			
ブダイ科	前上顎骨								
ブダイ科	角骨				/ 3	/ 2			
ブダイ科	方骨		1 /			1 / 1			
ブダイ科	主郷蓋骨						/ 1		
ブダイ科	第1椎骨					1		1	
ブダイ科	腹椎					1			
ブダイ科?	尾椎	6		1	3	1	6	3	
ソウダガンオ属	尾椎						1		
ニザダイ科?	前上顎骨?								
ニザダイ科	方骨							/ 1	
ニザダイ科	舌顎骨				/ 1				
ニザダイ科?	主郷蓋骨				/ 1				
ニザダイ科	歯顎骨	/ 1			1 /	1 /			
ニザダイ科	第1椎骨		1						
ニザダイ科	腹椎		2	2		1		2	
ニザダイ科	尾椎	5	17	1	3	1	2	7	
ニザダイ科	種鱗							1	
アイゴ属?	前歯骨				1 /				
アイゴ属	前上顎骨								
アイゴ属	方骨					1 /			
アイゴ属	第1椎骨							1	
アイゴ属	腹椎		4	1	1		2	5	
アイゴ属	尾椎		10	1				5	
アイゴ属	種鱗							1	
オニオコゼ科?	腹椎					1			
カレイ目	尾椎						4		
モンガラカワハギ科	前上顎骨				1 /				
モンガラカワハギ科	舌顎骨	/ 1				/ 1			
モンガラカワハギ科	第1椎骨								
モンガラカワハギ科	腹椎								
モンガラカワハギ科	背鰭棘				1				
モンガラカワハギ科	鱗			3				1	
モンガラカワハギ科	鱗							6	
ハリコブ科?	鱗板		1	1			6	3	
ハリセンボン属	鱗		2				2	1	
真骨類・未同定	主上顎骨								
真骨類・未同定	歯骨							1 /	
真骨類・未同定	前上顎骨/歯骨							1	
真骨類・未同定	角骨	2 /	1 /			1 /	1 /		
真骨類・未同定	方骨								
真骨類・未同定	主郷蓋骨		1 / 1						
真骨類・未同定	第1椎骨					1	1	1	
真骨類・未同定	腹椎						2		
真骨類・未同定	尾椎	1							
真骨類・保留	主郷蓋骨								
真骨類・保留	歯骨	12	83	28	14	5	4	59	
真骨類・同定不可	主上顎骨				/ 1				
真骨類・同定不可	前上顎骨								
真骨類・同定不可	角骨								
真骨類・同定不可	方骨								
真骨類・同定不可	歯骨	6	10	8		4	4	7	
真骨類・同定不可	種骨							4	
標本数合計		55	164	57	64	35	45	132	51

表6. 住吉貝塚の水洗資料における魚類遺体の概要 (表5に示した遺体以外) へは確認された種類。

遺体	魚骨		サシゴ類/白魚						外骨	
	ウナギ属	ウツギ科	フエキダイ科	フエキダイ科	フエキダイ科	フエキダイ科	フエキダイ科	フエキダイ科	フエキダイ科	フエキダイ科
4号住居			*	*	*	*	*	*	*	*
5号住居	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
8号住居	+	+								+
11号住居		+	+		+		+			+
12号住居	+	+	+	+	+				+	+

アジ科：カスミアジに類似する標本と、マアジ・ムロアジなどの小型種に類するものがみられ、前者を暫定的にギンガメアジ属、後者をアジ科(小型種)とした。前者はすべて現地採集資料で、大型個体である。後者は水洗資料から検出たもので、13号住居跡⑦の腹椎はムロアジ類に近似する。第1椎骨は、マアジにやや近い別種であり、アジ科か否かを含めて検討を要する。

コショウダイ類：コショウダイまたはコロダイに近似する前上顎骨・歯骨がみられた。コショウダイ属とコロダイの顎骨にはある程度の形態差があるようだが、標本の収集比較が不充分のため、ここではコショウダイ類とした。

フエキダイ科：フエキダイ科の同定については、これまでヨコシマクロダイの前上顎骨・歯骨が種レベルで同定可能なことが確認されているが(上野1979)、その他の種類については基礎研究が十分でない(金子はハマフエキ・イソフエキ・キツネフエキを記載しているが(金子2005など)、同定の根拠は明示されていない)。今回の分析に先立ち、名島弥生氏と共同で所蔵現生標本の比較検討を行った結果(福泉・名島、未発表)、暫定的な所見ではあるが、(1)前上顎骨によって属レベルの同定(ヨコシマクロダイ、ノコギリダイ、メイチダイ属、フエキダイ属の判別)ができる可能性が高いこと、また他のいくつかの部位でも属レベルで判別できる可能性があること、(2)フエキダイ属については、ハマフエキなどとアマミフエキなどの間でもかなり明確な形態差がみられるが、種レベルでの同定を行うにはさらに多数の現生標本の収集と比較骨学的検討を要すること、などの見出しが得られた(詳細な記載は稿を改めて行う予定である)。以上の所見に基づいて本貝塚のフエキダイ科前上顎骨を検討した結果、ヨコシマクロダイ、メイチダイ属、フエキダイ属と考えられる資料が確認された。大部分はフエキダイ属であり、アマミフエキなどに類するタイプ(以下「アマミフエキ型」と)とハマフエキなどに類するタイプ(以下「ハマフエキ型」)が同程度

の割合でみられた。また、口蓋骨・方骨もフエキダイ属に特徴的な形態と考えられたため、暫定的に属レベルで同定した。その他の部位についてはフエキダイ科として一括したが、椎骨については第1椎骨と腹椎の一部を除き、タイ科などとの判別が確実でないことから、「タイ型」とした。

チヨウチヨウウオ科：腹椎が同定された。側突起にきわめて個性的な構造が発達することから容易に判別できる。

ベラ科：咽頭骨は金子(1996, 2005)による「コブダイ」、「タキベラ」、「ベラ科A」、「同B」の各タイプとそれら以外(「ベラ科(その他)」)としてみられた。なお、コブダイ・タキベラについては咽頭骨で種の特長が可能に明確でないことから(たとえば筆者の所蔵現生標本の観察ではコブダイとシロクラベラ・イラなどのイラ属の咽頭骨は類似性が高い)、ここでは「コブダイ型」、「タキベラ型」とした。量的にはベラ科Bが最も多く、ベラ科Aとタキベラ型がこれに次ぐ。コブダイ型はまれである。ただし、以上のタイプはいずれも比較的大型の種であり、多くは現地採集資料である。いっぽう水洗資料からは「その他」の小型の咽頭骨がしばしば検出されており、実際の個体数としてはこれらが最多となるものと推測される。

ブダイ科：咽頭骨・前上顎骨・歯骨によってブダイ属、イロブダイ属、アオブダイ属が同定された(ブダイ属の咽頭骨には近似種のミゾレブダイが含まれる可能性がある)。量的にはアオブダイ属が大半を占める。イロブダイ属は現地採集資料で普通、ブダイ属は水洗資料でしばしば検出されている。アオブダイ属は大小各サイズの個体のみられるが、イロブダイ属は比較的大型の個体が目立つ。

ソウダガツオ属：水洗資料14号住居跡から椎骨が1点確認された。椎骨や棘の形状が独特で、他のサバ科魚類との判別は容易である。椎体横径7.4mm。このほか、5号・12号住居跡でも椎骨が確認されている(表6)

スマ：現地採集資料11号住居跡から尾椎が1点確認された。カツオにごく近縁の種だが、椎体側面の隆起線がカツオより太いことなどからスマと判定了。椎体横径約11.7mm。

マグロ類似種：現地採集資料から腹椎・尾椎がしばしば検出されている。ほとんどの資料は椎体横径26~28mmと大型で、他に同16mmの中型個体が1点ある。大型のサバ科でマグロに類似するが、神経棘が神経弓門の後半より発達し、マグロよりその角度が低いこと、椎体側面の隆起線前縁の窪みが不明瞭であること(マグロは明瞭)、椎体腹面中央の正中溝が広くブリッジがないこと(マグロは狭く中央にH字型のブリッジをも

つ)などで明らかに区別される。今のところ種類を特定するに至っていないが、筆者の所蔵現生標本との比較によってサワラ属、カマスサワラではないことを確認している。残る大型サバ科魚類の候補種はイソマグロのみであり、この種に同定される可能性が高い。同種と思しき標本は奄美大島宇宿小学校構内遺跡(名島2003b)からも報告されている。

ニザダイ科: ヒラニザに類似するものが大半だが、ツマリテングハギなどに類似するものもしばしばみられた。前者は全般に小型で、水洗資料から多数検出されている。後者は大型個体が多い。

アイゴ属 水洗資料からの検出が普通である。小型個体が大半を占める。前上顎骨・腹椎は独特の形態で容易に判別できる。他に方骨・主鰓蓋骨・尾椎が同定されており、これらはニザダイ科との類似性が高いが、尾椎は椎体側面に網目状の模様をもつ点や血管弓門側面に孔をもつ点で判別できる。主鰓蓋骨は保存状態が

悪い場合はニザダイ科との判別が微妙である。前頭骨は硬質で外表面に細かい網目状模様をもつ点特徴だが、比較研究が不充分のため「アイゴ属?」とした。

カレイ目 尾椎が同定された。椎体が短く前縁左右に小突起をもつ点や神経・血管両鞘の形状などはカレイ科との類似性を示すが、椎体前後の凹面の深さが前面で浅く後面で深い点など、ウツノシタ類に近い特徴もあることから、カレイ目とした。

その他 オジサンに近似する資料をヒメジ科、オニオコゼに類似する資料をオニオコゼ科?とした。いずれも現生標本の取集比較が不充分なため暫定的な同定だが、形態はかなり個性的で判別は容易である。

(3) 魚類遺体群の組成

水洗資料については、4mm資料のみの組成(図2上)、および4mm・2mm・1mm資料の合計に基づく組成(図2下)を示した(いずれも分析資料数が少なく有効な最小個体数を算出できなかったため、同定標本数比

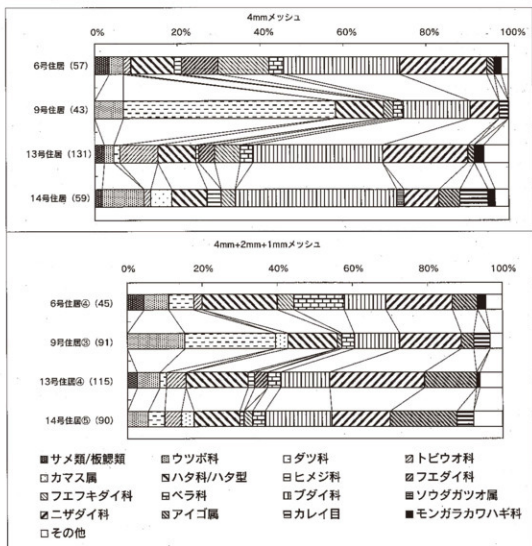


図2. 住吉貝塚の水洗資料における魚類遺体の組成。同定標本数(NISP)比による。()内はNISP合計

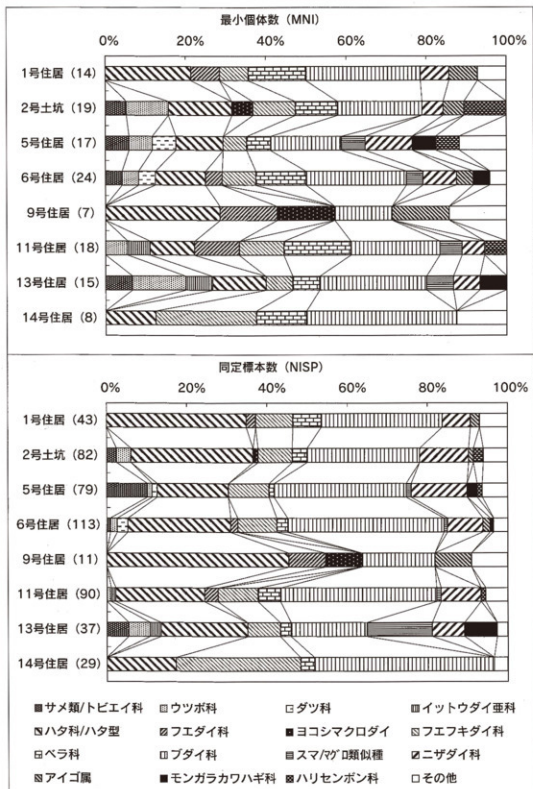


図3. 住吉貝塚の現地採集（ピックアップ）資料における魚類遺体の組成
上段は最小個体数（MNI）、下段は同定標本数（NISP）による組成。（ ）内はMNIまたはNISPの合計

表7. 住吉町塚の遺構の現地採集（ピックアップ）資料から検出された魚類遺体。左右のある部位は左/右で表示

種類	部位	1号住居	2号住居	5号住居	6号住居	9号住居	11号住居 (南区)	11号住居 (北区)	13号住居	14号住居
キヌ類	鱗		2	8		1			2	
トビエイ科	椎骨									
ウツボ科A	前鰓骨板		2							
ウツボ科A	主上鰓骨		/ 1						2 /	
ウツボ科A	側骨			/ 1		/ 1				
ウツボ科B	側骨					/ 1				
ウツボ科	側骨					/ 1		/ 1		
ダツ科	前上鰓骨					1 / 1				
ダツ科	側骨					/ 1				
イトウダ科(亜科)	前上鰓骨							/ 1	1 /	
ハタ科(マハタ型)	前上鰓骨		2 /			1 /			2 /	
ハタ科(マハタ型)	側骨	2 / 1		1 /		3 / 2	/ 2	/ 1		1 /
ハタ科(スジアラ型)	前上鰓骨		1 / 1							
ハタ科(スジアラ型)	側骨	/ 1		/ 1						
ハタ科	前上鰓骨	1 / 1								1 /
ハタ科	側骨	/ 2	/ 1			1 / 2		1 /		1 /
ハタ科	方骨	1 / 1		1 / 1		1 /		1 / 1	/ 2	
ハタ科	前鰓蓋骨	/ 1	1 /			2 /				
ハタ科	半鰓蓋骨					1 /				
ハタ科	鰓蓋骨	/ 1	2 / 3			1 /		/ 1	1 /	1 / 1
ハタ科	側骨									
ハタ科	尾椎	2	6	3	6	1	3	4	2	
ギンガメアジ属	側骨		1	5	7	5	3	3	1	
ギンガメアジ属	尾椎	1 /				/ 1				
ヒメジ科	側骨			2						
フエダイ科	主上鰓骨			1 /						
フエダイ科	前上鰓骨					/ 1	/ 1			
フエダイ科	方骨	1 /					1 /	1 / 1		
フエダイ科	前鰓蓋骨					/ 1				
コショウダイ科	前上鰓骨									1 /
ヨコシマダロダイ	側骨		/ 1			/ 1				
フエフキダイ属(ハマフエフキ科)	前上鰓骨				1 /				/ 1	
フエフキダイ属(ハマフエフキ科)	前上鰓骨		/ 1		/ 1			2 /		2 / 2
フエフキダイ属(中鰓型)	前上鰓骨			1 / 1						
フエフキダイ属	方骨	/ 1	1 /	/ 1				/ 1	/ 1	1 /
フエフキダイ属	白鰓骨	/ 1	/ 2	1 / 1	/ 2		/ 1			
フエフキダイ科	主上鰓骨	1 / 1	1 /			1 /		1 /		1 /
フエフキダイ科	側骨			1 /	2 / 1		/ 1	1 /	/ 1	2 / 1
フエフキダイ科	側骨	/ 2		/ 1	1 / 1					
フエフキダイ科	第1鰓骨						1 / 2			
フエフキダイ科	鰓蓋骨						2			
フエフキダイ科	鰓蓋骨	2	5	2	3		3	2	1	
イシダイ属	前上鰓骨									
ベラ科(タキベラ型)	上鰓蓋骨					1 /		1 /		
ベラ科(タキベラ型)	下鰓蓋骨	1	1		2		1			
ベラ科	下鰓蓋骨							1		
ベラ科B	下鰓蓋骨					1				
ベラ科(その他)	下鰓蓋骨							1 /		
ベラ科	前上鰓骨	/ 2	/ 1					1 /	/ 1	
ベラ科	鰓蓋骨									1
ベラ科	尾椎				1					
フダイ属	下鰓蓋骨									1
イロブダイ属	上鰓蓋骨		1 /				/ 1			
イロブダイ属	前上鰓骨	/ 1	1 /			/ 1		1 /	1 /	
イロブダイ属	側骨									
アオブダイ属	上鰓蓋骨	1	2 /	2 /	3 / 1		/ 1	3 /		/ 1
アオブダイ属	前上鰓骨	/ 1	3	3 /	4 /	1 /	1	2 /	3	/ 1
アオブダイ属	側骨	3 / 2	1 / 3	3 / 3	4 / 5	3 / 1	2 /	1 /		2 / 1
アオブダイ属	側骨	2 /	2 / 2	1 / 1	5 / 5	3 / 1	1 / 1	1 /		/ 1
アオブダイ属	主上鰓骨	/ 1		2 /	1 /					
フダイ科	側骨		/ 1		1 / 2				/ 1	
フダイ科	方骨									
フダイ科	第1鰓骨					1		1		
フダイ科	鰓蓋骨	1	1		2		3	4		1
フダイ科	鰓蓋骨	2	5	13	6		5	4	1	5
フダイ科	尾椎						1			
マダロ鰓似種	鰓蓋骨			1						
マダロ鰓似種	尾椎				1					6
ニサダイ科	前上鰓骨				1 /					
ニサダイ科	側骨			/ 1						
ニサダイ科	方骨			/ 1			1 /			
ニサダイ科	主鰓蓋骨		/ 1	2 /	1 /					
ニサダイ科	鰓蓋骨	/ 1	1 / 1		2 /				/ 1	
ニサダイ科	鰓蓋骨		1	2	4			1	7	2
ニサダイ科	鰓蓋骨		6	4	6			4	2	
ニサダイ科	鰓蓋骨	2	1	1	6		1	4	2	
アイゴ属?	主鰓蓋骨				1 /					
アイゴ属?	尾椎	1	1							
モンガクカウハク科	前上鰓骨					1				
モンガクカウハク科	側骨			/ 1	/ 1				1 /	1 /
モンガクカウハク科	背鰓骨			1						
ハリセンボン属	椎		2	1	1			1		
ハリセンボン科	前上鰓骨									
真骨類・未定	主上鰓骨						1 /			
真骨類・保留	側骨	3	17	15	24			10	4	2
真骨類・同定不可	椎骨			1	2					
		48	100	94	146	11	43	64	42	31

表8. 住吉貝塚の現地採集（ピックアップ）資料における魚類遺体の概要
表7に準じた分類以外、●多い、○普通、△少ない

遺体/包含層	河口	サンゴ礁/岩礁										基浜
		クロダイ属	ウツボ科	ハタ科	アイゴ属	フエキダイ科	ベラ科	サメ類	マグロ類	マサキ属	ハナハコ属	
4時住居		△		○		△	○		△	△	△	△
8時住居				●		○	△	●		△	○	△
12時住居		△		○		○	△		△	△	△	△
包含層4トロンチ		△		○		△	●		△	△	△	△
包含層16トロンチ		△		○		△	●		△	△	△	△

本表は季節別の立派な魚類をもとめたものであり、季節的な多寡については記載していない。

を示した)。まず後者によって全体的な組成をみると、ハタ科、ブダイ科、ニサダイ科、アイゴ属が多く（最小個体数ではハタ科・ブダイ科が最多となろう）、ウツボ科、ベラ科がこれに次ぐ。ほかにダツ科、トビウオ科などもコンスタントな出土がみられる。4mm資料では全体としてブダイ科が最も多く、ニサダイ科、ハタ科がこれに次ぐ。ダツ科は9号住居跡で集中的に出土しているが、他では少ない。ウツボ科、フエキダイ科なども普通である。

現地採集資料（図3）にみられる大型魚骨ではブダイ科が最も多く、ハタ科、フエキダイ科、ベラ科がこれに次ぐ。サメ類、ウツボ科、フエダイ科、マグロ類（おそらくイソマグロ）、ニサダイ科、アイゴ属なども少数ながら多くの遺構から検出されている。

以上を総合すると、全体的にブダイ科、ハタ科が主体をなす。水洗資料ではウツボ科、ニサダイ科、アイゴ属が多く、ダツ科、トビウオ科などの小型魚も特徴的にみられる。現地採集資料ではフエキダイ科、ベラ科が多く、ほかにサメ類やマグロ類種などの大型魚が特徴的である。全体として、圧倒的な優占種がみられず、多くの種類が混在する多様性の強い組成が形成されている。少数種の中にも、ニシン科、ウナギ属、トビウオ科、アジ科（小型種）、ヒメジ科、チョウチョウ科、ソウダガツオ属、スマなど、これまでほとんど報告されることなかった種類が多く含まれている。とくにトビウオ科、スマ、ソウダガツオ属については、筆者の知る限り、これまで奄美・沖縄の貝塚時代遺跡から報告された例はない。

出土魚類を生態環境別にみると、サンゴ礁や岩礁域に棲む魚が圧倒的に多い（ウツボ科・イトウダイ科・ハタ科・フエダイ科・ヨシマクロダイ・フエキダイ属・ベラ科・ブダイ科・ニサダイ科・アイゴ属・モンガラカワハギ科・ハリセンボン属など）。いっぽう、本遺跡で特徴的なのは、ニシン科、ダツ科、トビウオ科、カマス属、ギンガメアジ属、アジ科（小型種）、ソウダガツオ属、スマといった沿岸～沖合の表層

～中層を生息域とする回遊魚が目立つ点である。マグロ類似種・サメ類についても、種を特定できていないが、このグループに含まれると考えられる。そのほかでは淡水の流入のある水域に生息するクロダイ属、淡水性のウナギ属がわずかに混じる。

4. 考察

(1) 奄美大島・沖縄諸島の貝塚時代遺跡との比較

奄美大島と沖縄諸島の間（徳之島～与論島）の遺跡において詳細な魚骨のデータが得られたのは今回が初例である。ここでは本貝塚の魚類組成を奄美大島および沖縄諸島の貝塚時代遺跡と比較し、その特徴をみる。まず多数の比較資料がある現地採集資料に基づいて全体的な組成を比較すると（図4）、本貝塚は多様なサンゴ礁・岩礁性魚類が混在する点で奄美大島との共通性が明らかであり、とくにほぼ同時代の笠利町宇宿小学校構内遺跡1・II層との類似性が高い。明確な相違点としては、奄美大島ではクロダイ属が普通であるのに対し、本貝塚ではまれな点が挙げられる程度である。これに対し、沖縄島やその周辺島嶼の貝塚時代遺跡では、サンゴ礁海岸に面した地域ではブダイ科が圧倒的に多く（ただしグスク時代以降はこのパターンが崩れる）、金武湾・中城湾といった砂泥底の内湾に面した地域ではフエキダイ科・ベラ科が卓越する傾向にあり、いずれも本貝塚とは明らかにパターンが異なる。

また、フエキダイ科とベラ科について、本貝塚と同様に詳細な同定がなされている奄美大島笠利町マツノト（樋泉、印刷中）・同安良川（樋泉2005）、沖縄島うるま市平敷屋トウバル（金子1996）の各遺跡と比較した結果、種構成に地域性が存在する可能性が明らかとなった（図5）。フエキダイ科については、マツノトではメイチダイ属とフエキダイ属（アマミフエキ型）、平敷屋トウバルではフエキダイ属（ハマフエキ型）が大半であるのに対して、本貝塚ではフエキダイ属のアマミフエキ型とハマフエキ型が同程度の割合で混在しており、ちょうど両者の中間的な様相である。ベラ科については、奄美大島ではベラ科B(1)、平敷屋トウバルではコブダイ型が大半である。本貝塚はタキベラ型とベラ科Aが多くみられる点で固有の特徴を示すが、ベラ科Bが最多である点は奄美大島と同様である。比較した3遺跡はいずれも貝塚時代後期で、本貝塚とは年代が異なるが、こうした相違は周辺海域の魚類相の違いを反映した地域性である可能性が高い。

以上のように、本貝塚の魚類相は全体的に奄美大島との類似性を強く示しており、沖縄諸島とは明らかに異なっている。

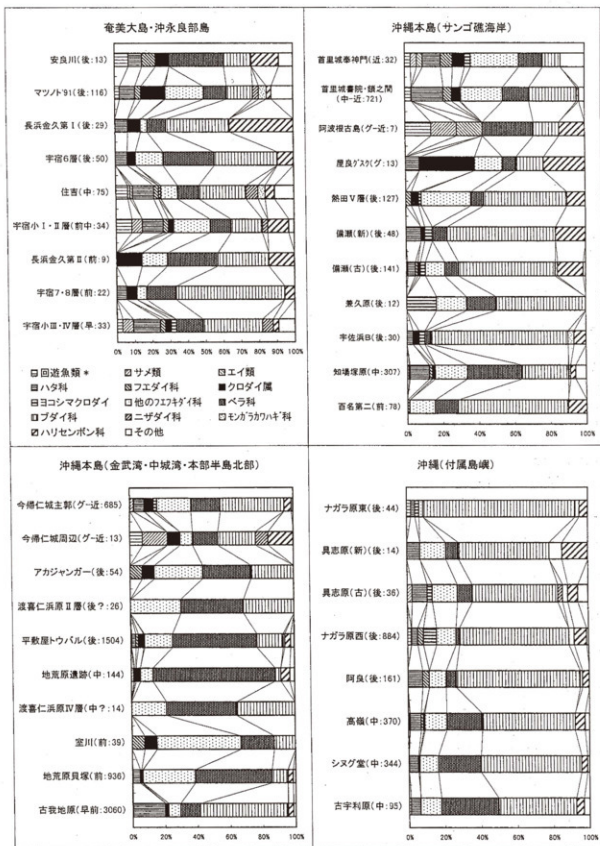


図4. 最小個体数(MNI)による魚類遺体群の組成の比較(現地採集資料)。

()内は年代、最小個体数の合計。早、前、中、後、それぞれ沖縄風土時代早期、前期、中期、後期。グ:グスク時代。中:中世。近:近世

* 回遊魚類:カマス属・ダツ科・アジ科・サバ科など。マツト遺跡は現在分析中のため暫定値。

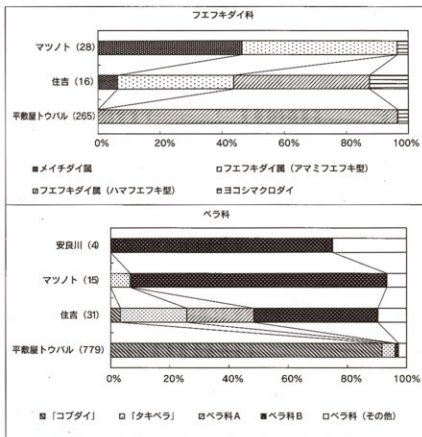


図5. 住吉貝塚と平均値トウバル遺跡（沖縄県うるま市）、マツノト遺跡・安良川遺跡（奄美大島笠利町）のフエキダイ科・ペラ科組成の比較

本貝塚のデータは表5・表7以外に包含層（トレンチ）資料も含む。マツノト遺跡は分析中のため暫定値。

(2) 魚類遺体群から推定される古環境

出土した魚骨の大半はサンゴ礁・岩礁域周辺の生息種で占められており、おそらく現在の魚類相と大きく異なっていないと思われることから、当時の付近の海岸環境はすでに現在と基本的には同様のものであったことが想像できる（ただしこの点についてはさらに詳細な同定と現生魚類相の確認が必要である）。なお、少数ながらウナギ属が検出されたことから周辺に淡水域の存在が示唆されるが、クロダイ属がごく希であることから、遺跡付近に恒常的に流入するような河川は存在しなかったのではないかと想像される。

(3) 魚類資源利用の特徴

本貝塚の魚骨の特徴として第一に指摘できるのは、その出土量（包含密度）とくに小型魚骨が著しく多い点である。このことから、本貝塚の漁労活動（魚類利用）がきわめて活発であったこと、とくに小型魚の漁が中心であったことが示唆される。一般に貝塚時代中期（縄文晩期）は漁労が低調な時期と理解される傾向にあるように思われるが、本貝塚にはこのイメージはまったく当てはまらない。

魚類利用の内容は、遺跡前面のサンゴ礁域でのブダイ科、ハタ科をはじめとする様々なサンゴ礁・岩礁性魚類の漁が主力である。これらの魚のサイズ分布をみると、ハタ科、ニザダイ科、アイゴ属などは小型魚（幼魚または小型種）が主体だが、フエキダイ科、ペラ科のタキペラ型やペラ科B、イロブダイなどは比較的大型の魚が目立つ。おそらく前者は小型魚の捕獲に適した漁法（たとえば罾漁など）、後者は大型魚を選択的に捕獲する漁法（たとえば釣漁や刺突漁など）で捕獲された可能性が強く、とくに前者の比重が高かったと推定される。

なお、先に述べたように沖縄諸島（サンゴ礁域）の遺跡ではブダイ科への著しい偏りが認められるのに対し、奄美大島の遺跡や本貝塚では多様なサンゴ礁・岩礁性の魚種が捕獲されている。奄美大島における魚類組成の多様性の原因について名島（2003a）は、(1) 奄美大島北東海岸のサンゴ礁は幅が狭く礁池の発達が悪いこと、(2) 現代のブダイ科を主対象とする追い込み罾漁は潮汐にあわせて礁池を出入りする魚群を狙うため、礁池の存在が漁場の条件となること、(3) この

ため礁池の乏しい奄美大島北部は大量のブダイを捕獲するには適さない反面、多様な魚種を対象とする釣漁、突き漁、魚毒漁に適した漁場が多いこと、を指摘している。本貝塚の面する沖永良部島西海岸も奄美大島北部と同様にサンゴ礁の発達が弱く礁池が狭いことから、名島の解釈は本貝塚にも当てはまる可能性がある。

しかし、上記の通り本貝塚では多様な小型魚類がむしろ主体であり網漁の発達を否定できないと考えられる。また沖縄島北端の宇佐浜B遺跡（弥生時代併行期。金子1989）では、沿岸のサンゴ礁は本貝塚と同様に貧弱であるにも関わらず、魚類組成はブダイ科に集中している（図4）。本貝塚からの距離という点では、宇佐浜B遺跡は奄美大島よりはるかに近い（天気がよければ沖永良部から沖縄島をはっきりと視認できる。にもかかわらず、両遺跡の様相の違いは明らかである。このように、沖永良部島を含む奄美諸島と沖縄諸島の違いをサンゴ礁地形やそれに関連する漁法の違いのみで説明することは困難であるように思われる。

本遺跡の魚類相の大きな特色のひとつは、トビウオ科に代表される様々な回避魚類が出土した点である。これらのうちニシン科（ミズン類？）、ダツ科、トビウオ科、カマス属、アジ科（小型種）はいずれも小型で、群をなす表層回避魚が多いことから、回避してくる魚群をねらった網漁の存在が示唆される。いっぽうサメ類、キソメアジ属、ソウダガツオ属、スマ、マグロ類似種といった大型の回避魚類もコンスタントな出土がみられることから、これらを対象とした計画的な漁の存在が示唆される。漁法としては、ソウダガツオ属やマグロ類似種などについては釣漁を想定するのが妥当と思われるが、サメ類などについては刺突漁の可能性も考慮すべきであろう。

回避魚類については、これまでもダツ科、カマス属などの出土がしばしば報告されているが、これらは沿岸性が強く、礁縁付近や礁池内まで来遊する。これに対し、今回確認されたトビウオ科、スマ、ソウダガツオ属は外洋性が強く、沿岸浅瀬に寄りつくことはまれである。マグロ類似種も、イソマグロであるとするればサンゴ礁縁外の中層が主な生息域である。これらの魚の出土から、漁場はサンゴ礁外の海域にある程度広がりをもってたと推定される。

以上のように、本貝塚では漁労の行動圏がやや広く、外海への進出傾向が認められる。また漁法についても相応の多様性の存在が推測される。こうした外海域での漁労活動の展開は、これまで奄美・沖縄諸島の貝塚時代遺跡ではほとんど知られてこなかったものであり、本遺跡の大きな個性といえる。ただし、より外洋性の強いカツオなどは確認されていないことから、外海域での行動範囲はある程度限られたものであった可能性

が高い。

5. 魚類遺体群からみた住吉貝塚の重要性

これまで沖縄諸島と奄美大島の間でまとまった魚骨資料が得られている遺跡は少なく、さらに詳細な報告がなされている遺跡は皆無であった。今回本貝塚で採集された魚骨は保存状態が良く出土量も豊富であり、さらに年代の確定した資料が多く、質・量ともに充実している。また、今回の調査では堆積物の水洗選別による小型魚骨の詳細な採集が行われ、さらに同定に際しても椎骨等これまでほとんど扱われてこなかった部位も同定するよう努めた。こうした良好な資料と詳細な調査分析の結果、本貝塚における多様な漁労形態の実態が明らかとなった。その成果を要約すると、次の通りである。(1) 大量の魚骨の出土から、貝塚時代中期におけるきわめて活発な漁労活動の存在が確認された。(2) 出土魚類相から当時の海岸環境は現在と基本的に同様のものであったと推定される。(3) 魚類組成の特徴は奄美大島に類似し、沖縄諸島とは異なる。(4) 漁労の内容はサンゴ礁域での多様な魚を対象とした漁が主力であり、とくに小型魚を対象とした漁が活発であったと推定される。(5) トビウオ科やソウダガツオ属などに代表される外洋性回避魚の出土から、外海域での回避魚漁の展開が確認された。

以上のように本遺跡の魚骨資料からは、この地域における貝塚時代漁労の様相を解明するうえで有意義な知見が豊富に得られた。とくに本貝塚と奄美大島の間には魚類組成の強い類似性が確認されたことは、漁労文化圏の広がりを解明する上で大きな進展といえる。また、これまで知られてこなかった外海域での回避魚漁の存在は、沖永良部島のような沖縄—奄美中間域の小型島嶼における個性とも考えられる。これまで南西諸島の貝塚時代遺跡の漁労研究（少なくとも魚骨研究）は沖縄と奄美大島とに分断して行われてきた感がある。本貝塚において詳細な魚骨データが得られたことは、今後奄美—沖縄諸島全体を視野に入れた広域的な比較研究を進めていく上で大きな足がかりとなるものであり、この地域の先史社会の地域構造を解明していく上でも本貝塚の存在意義は大きい。

謝辞 熊本大学木下高子先生には住吉貝塚の調査に参加する機会を与えていただいた。知名町教育委員会森田太樹氏、鹿児島県教育庁文化財課堂込秀人氏には発掘現場での試料採取や水洗作業などをご支援いただき、また調査分析全般にわたって多大なるご協力・ご教示を賜った。知名町教育委員会武原吉彦氏にも調査に際して様々な便宜をはかっていただき、また沖永良部島の文化・歴史全般について有意義なご教示を賜つ

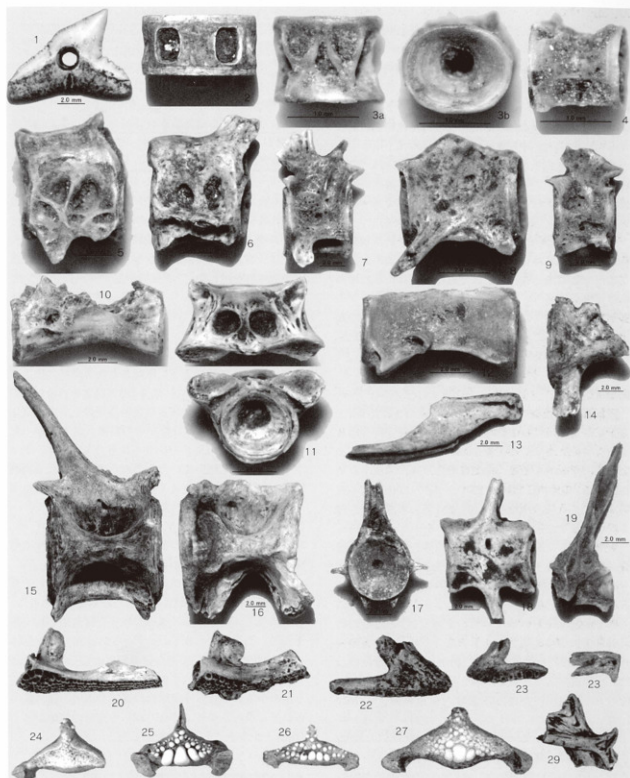
た。鹿児島大学本田道輝先生、千葉県立中央博物館黒住附二氏、札幌大学高宮広土氏には、調査や研究会での議論を通じて数々のご教示を賜った。国立歴史民俗博物館西本豊弘先生・小林園子氏には所蔵の現生標本を閲覧させていただいたほか、西本先生には資料分析の便宜を図っていただいた。慶徳義塾大学名島弥生氏には魚骨同定に関してご教示を賜った。末筆ながら、以上の方々に厚く御礼申し上げる。

注

(1) 安良川遺跡報告書におけるペラ科咽頭骨のタイプ名(樋泉2005)は、本報と異なるので注意されたい。安良川遺跡報告書の「ペラ科A」、「ペラ科B」は、それぞれ本報での「ペラ科B」、「ペラ科(その他)」に対応する。

参考文献

- 上野輝弥 1979 「沖縄県伊江島ナガラ原西貝塚産魚類遺骸」伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書自然遺物篇 伊江村教育委員会
- 金子浩昌 1989 「宇佐浜B貝塚出土の脊椎動物遺存体」宇佐浜遺跡発掘調査報告 沖縄県教育委員会
- 金子浩昌 1996 「動物遺体(軟体動物を除く)」平敷屋トウバル遺跡 沖縄県教育委員会
- 金子浩昌 2005 「脊椎動物遺体」首里城一書院・鎮之間地区発掘調査報告書、沖縄県立埋蔵文化財センター
- 樋泉岳二 2002 「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から— 熊本大学文学部
- 樋泉岳二 2005 「安良川遺跡から出土した脊椎動物遺体群の概要」安良川遺跡 笠利町教育委員会
- 名島弥生 2003a 「琉球列島における遺跡出土魚種組成の比較」東海史学38
- 名島弥生 2003b 「宇留小学校構内遺跡出土の動物遺存体について」奄美考古5



1: メジロザメ科? 歯 (穿孔孔), 2: サメ類椎骨, 3・4: ニシン亜科? (3a・3b: 腹椎, 4: 尾椎), 5: ウナギ属腹椎, 6: ウツボ科椎骨, 7: ダツ科腹椎, 8・9トビウオ科 (8: 腹椎, 9: 尾椎), 10: カマス属腹椎, 11: アジ科 (小型種) ? 第1椎骨, 12: アジ科 (小型種) 腹椎, 13: ヒメジ科歯骨R, 14: ソウダガツオ属尾椎, 15: マグロ類似種腹椎, 16: スマ尾椎, 17: カレイ目尾椎, 18: ニザダイ科尾椎, 19: アイゴ属腹椎, 20: ハタ科 (マハタ型) 前上顎骨R, 21: ハタ科 (スジアラ型) 前上顎骨R, 22: フェエキダイ属 (アマミフェエキ型) 前上顎骨L, 23: フェエキダイ属 (ハママフェエキ型) 前上顎骨R, 24: ベラ科 (コブダイ型) 下咽頭骨, 25: ベラ科 (タキベラ型) 下咽頭骨, 26: ベラ科A下咽頭骨, 27: ベラ科B下咽頭骨, 28・29: オニオコセ科? (28: 歯骨R, 29: 角骨L). 縮尺 15: ほぼ原寸, 20~29: 4/5, その他はスケールバーを参照.

第4節

貝類遺体からみた沖永良部島住吉貝塚の特徴

黒住耐二 (千葉県立中央博物館)

はじめに

住吉貝塚は、沖永良部島南東部の海岸段丘上に位置する縄文時代後期から晩期(沖縄貝塚時代中期を中心とする)の遺跡である。この遺跡の貝類に関しては、陸産貝類がレンズ状の単純な層を形成し、海産貝類は少量であり、このことから陸産貝類は食用であったと考えられている(園分ら, 1959; 河口, 1988)。

今回、2001年度から2004年度に発掘された貝類遺体および土壌資料を検討する機会を与えて頂いた。ここに、その概略を報告し、貝類遺体から見た本貝塚の特徴について述べてみたい。報告に先立ち、サンプルの検討に種々お世話いただいた知名町教育委員会の森田大樹氏、遺跡に関する様々な状況をご教示いただいた早稲田大学の樋泉岳二氏にお礼申し上げる。

方法

本貝塚では、住居跡を含む多くの遺構が認められ、さらに各遺構は単純な構造ではなく、灰層を持つなど多様な状態と多少の時間幅を有するものであった。また今回のサンプルでは、微細な遺物・遺体の抽出まで目的とされたので、現地でピックアップ法(現場資料)によるもののみならず、土壌資料1として知られるなど、様々な方法が採用された。そのために表1に、今回対象とした貝類遺体の処理方法等を示した。土壌資料は、遺跡の土壌をいわゆる水洗選別あるいはフローテーションと称される土壌を水中で処理したものである。今回は、多少処理方法が異なることと本報告の他章での混乱を避けるために、土壌資料1として知名町教育委員会で処理されたものと、土壌資料2の報告者がこれまで行ってきた処理(黒住, 1997)を区分した。土壌資料は、水中で浮いた部分(浮遊部分: light fraction: LF)と沈んだ部分(沈殿部分: heavy fraction: HF)に分けている。土壌資料1では、浮遊・沈殿部分とも、1mmメッシュ上に残ったものである。ただ、浮遊部分に関しては、今回の土壌サンプルでは、現生の草の根が極めて多く、1mmより小さな貝類遺体も多数抽出されていた。また沈殿部分の一部のものは、さらにフルイを用いて、4・2・1mmで分けた。

貝類遺体は、種を同定し、確認部位・オガヤドカリ類の宿貝や製品の有無等を記録した。陸産貝類等の一部の種については、成貝・各サイズの幼貝等の成長段階や現生個体より古い時代の個体か等の古さもチェ

表1. 沖永良部島住吉貝塚の貝類遺体の処理方法

	ピックアップ資料 (現場資料)		土壌資料1 (浮遊部分(LF))		土壌資料2 (沈殿部分(HF))	
	浮遊部分(LF)	沈殿部分(HF)	浮遊部分(LF)	沈殿部分(HF)	浮遊部分(LF)	沈殿部分(HF)
4号住居 #203						
6号住居 (空)						
6号住居 A-3: 床付近	●					
6号住居 A-4: 日置					●	●
12号住居 (空)						
12号住居 計13	●	●(1/2)	●	●	●	●
12号住居 第一区画						▲(一画)
種別内容	大・中形遺物 貝類・製品 遺入等	陸産小遺物 高橋等	大から中形小遺物 貝類・製品 海産貝類・ 古道具等	陸産小遺物 高橋等	陸産小遺物 高橋等	全て

ックした。また、シラナミとチョウセンサザエ(フタ)に関しては、推定復元を含めて計測を行った。ただし、溶解の進んでいるものに関しては、計測から外した。シラナミでは、個体数が少なかったので、左右殻の合計で個体数を示した。

結果および考察

1) 食用貝類

a. 中・大形種

ピックアップ法によって確認された各遺構の出土層位ごとの詳細を付表1に、全体の3%以上を占めたものを優占種としてその組成と全食用貝類の生息場所類型ごとの組成を表2に示した。その結果、最も多かったのはオキニシで17%、ハナマルユキ、シラナミ、チョウセンサザエと続いていた。これは、いずれも岩礁性の貝類で、砂底に生息する種は少なかった。生息場所類型の組成では、優占種に従って干瀬(礁原: リーフ)が半数を占めており、1/4がイノー(礁池)の、岸側潮間帯の中・下部が約15%で、この3つの類型で全体の約90%となっていた。

これは、遺跡前面の環境が、当時から現在と同じようなイノーの発達しない状況にあったためと考えられる。その中でも、シャコガイ類のシラナミは食用として好まれていたようで、図1に示すように計測可能な個体(完形でなくとも復元可能な個体を含めて)のモードは7-8cmにあり、比較的小型の個体まで採集していたことがわかる。一方、沖縄諸島の遺跡での出土個体数の多いチョウセンサザエでは、むしろ大形の個体が多く(図2)、シラナミと対照的であった。

表2. 沖永良部島住吉貝塚の食用貝類遺体(ピックアップ法による)

種別	個体数	頻度 (%)	生息場所	生息場所類型	頻度 (%)
オキニシ	49	16.96	1-3-a	I: 外洋-サンゴ礁域	
ハナマルユキ	35	12.11	1-3-a	I-2: 岩礁域上部	0.35
シラナミ	25	8.65	1-2-a	I-1: 岩礁域中・下部	14.13
チョウセンサザエ	19	6.57	1-3-a	I-2: イノー(礁池)内	26.86
ヤシシガキカラ	15	5.10	1-2-a	I-3: 干瀬(リーフ)	49.47
ササガクハモ	13	4.50	1-1-a	I-4: 陸産域	2.83
イボシマハモ	10	3.46	1-2-a	II: 内湾-軟石域	3.53
合計	[289]	57.44		III: 河口干瀬-ワグロ-域	1.06
				IV: 淡水域	0.00
				V: 埋没域	1.77

イノエの発達した沖縄島の貝塚時代後期の遺跡でのシラナミの殻長組成は、およそ10cm程度にピークを有するものであり(黒住, 2002a)、本遺跡と類似したイノエの発達した悪い沖縄島北東部に位置する宇佐浜B貝塚(貝塚時代後期)でも同様にシラナミのサイズは大きい(黒住, 1989b)。同様に、住吉貝塚とはほぼ同時期の貝塚時代中期の沖縄島本部半島の西長浜原遺跡でも、シラナミは10cm程度の大きさである(黒住, 2006)。住吉貝塚の7-8cmのシラナミは、同遺跡前面のサンゴ礁の発達が悪いために、小形であったのではないかとことも考えられよう。しかし、沖永良部島よりさらにサンゴ礁の発達の悪い小笠原諸島父島での報告者の観察では、本種の捕獲規制が行われていることもあり、殻長10cmを超えるシラナミが潮間帯下部で比較的高密度で観察された。これらのことから、住吉貝塚における7-8cmのシラナミは、この貝塚の人々の本種に対する強い嗜好性の結果であると考えられる。

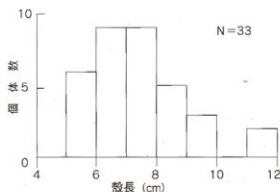


図1 シラナミの殻長組成

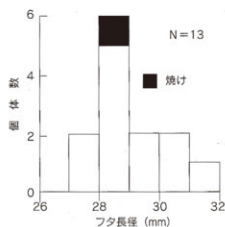


図2 チュウセンサザエのフタ長径組成

b. 小形種

住吉貝塚では、土壤資料を細かいメッシュで水洗選別した結果、殻サイズが1cm程度のイシダタミアマオブネやコンペイトウガイが多く確認され、これらでは割れているものも認められた(表3)。これらの巻貝は、オカヤドカリの宿貝として、貝塚へ持ち込まれた個体も存在するが、これらの貝類と同じ場所に生息するコガモガサ等の小形のカサガイ類も目立つことから、小形巻貝が意図的に利用されたことは確実と考えられる。このような小形貝類の「ダシの利用」(肉を食用とする可能性が高いもの、利用の主目的はダシとする考え)は、フルイ調査を行った貝塚時代後期や古代相当期の奄美・沖縄の遺跡でも想定されている(黒住, 2002)。奄美大島北東部の遺跡では、二枚貝のリュウキュウヒバリや巻貝のアマオブネ類・カサガイ類が用いられており、沖縄諸島の伊江島ではリュウキュウヒバリ・ミドリアオリや住吉貝塚でもみられたイシダタミアマオブネが多く出土している。また、沖縄諸島の多くの遺跡で優占種となっている二枚貝のイソハマグリ(例えば上地, 1986)も同様なダシの利用と考えられよう。このようなダシ的に利用する小形貝類の組成は、やはり遺跡前面の海岸環境に規定されていると考えられる。

今回得られた小形カサガイ類のコガモガサは、主に凹凸の激しい隆起石灰岩の潮間帯上部に生息する種であり、転石下や平坦面に生息するカサガイ類と異なり、その採集は比較的難しい。そのため、本種を採集するためには、ヘラ状の道具が必要であったと考えられる。この想定に合うような石製品や貝製品は認められていないと思われるので、貝類採集用の木製ヘラが存在していたことも考えられよう。

c. 微小種

本遺跡では、土壤資料を上記のように最小1mmメッシュで篩っているが、海藻や海草上に生息する微小な葉上性海産貝類が集中して得られることはなかった(表4)。琉球列島において想定される葉上性貝類としては、小形のカニモリガイ類やフトコロガイ類が考えられる。主に関東地方の縄文時代中・後期の貝塚からは、アマモのような海草上に生息するシマハマツボのような種が集中して出土することからアマモ等の利用が、また葉上性の微小貝類やウズマキゴカイ類の焼けた殻がまとまって出土することから灰塩のような「藻塩焼き」が考えられている(例えば加納, 2001等)。ただ後者の焼けたものは、海藻等ではなく、枯死した植物のアシ(葦)とともに持ち込まれたという考えもある(例えば黒住, 1994b)。いずれにしても、本遺跡では、このような微小海産貝類がほとんど得られず、海藻/海草利用や灰塩等は認められなかったわけである。この未確認の状況は、奄美・沖縄の先史時代貝塚

表3. 沖永良部島住吉貝塚小形貝類群集 (4 mmメッシュ以上)

種名(海産)	メッシュサイズ(mm)	MNI**	12号/原		4号BT		6号		生息場所
			原	区画	#203.HF	MNI	1/2抽出	MNI	
コガネガキ	9, 2f	11		1h	1b	1			I-O-a
シダタミマアオブネ	47(9b), 16f(10), 3a	53(10)			[1]				I-O-a
ヒメイシタミマアオブネ	1f	1							I-O-a
コンダカアマガイ	1f	1							I-O-a
キバアマガイ	1, 1u	2							I-O-a
ホシノスズラタマキビ	2, 1bb, 1bh	3(1)			1h	[1]			I-O-a
ホシノスズラタマキビ	6(11), 9f(2), 2u	9(3)							I-O-a
コンダカアマガイ	1, 1, 3a, 7b(1b)	9		1	1				I-O-a
コシツカイソウ	4	1							I-O-a
イワニモリ	1u	1							I-1-a
キヨロカカラ	3u, 1ol	3							I-1-a
コマダライモ	1f	1							I-1-a
リヤカライモ	2, 2b, 2u	4							I-1-a
コシツカイソウ	7f(1e), 1u, 1f	7(1)							I-2-a
コシツカイソウ	1u	1							I-2-a
リュウキユツノマタ	1b	1							I-2-a
キヌカツキ	2f	2							I-2-a
ツタハ	1, 1j	2							I-2-a
カヨロヒンササエ	1f	1							I-2-a
カヨロヒンササエ	1, 5u, 1ol	8	1f		2f	1	1f	1f	I-2-a
オキニシ	3u	3							I-2-a
ツノレイシ									I-2-a
シロイカレイシ	1b, 1ol	2							I-2-a
タカラガイ	1j, 5f(1b, 1e)	1(2)			1be	[1]			I-2-a
小形イモガイ	3b(1b)	2							I-2-a
中形イモガイ	1h, 1, 1u	2(1)							I-2-a
ヒメワウミカニモリ	TuB	1							I-2-c
海産巻貝	TuB	1							I-2-c
カワニナ	2	2							I-2-c
鹿沼綱(淡水巻)									IV/5.6
オキニシ	3ac, 3abc, 1uc	[6]		1wb	1				V-8
オキニシ	1f	1							V-7
エラマダカマイマイ	5u, 1ab, 1f, 1aol	11							V-7
エラマダカマイマイ	11, 3ol(1c), 2jcl	5(1)		2jcl					V-5
エラマダカマイマイ	1b	12		f	2	2u, 3f	3		V-8
エラマダカマイマイ	8u, 1mb, 1ab	18		f	1	1ab, 1mj	[1]		V-7
エラマダカマイマイ	7ab, 1l, 2f	3a		3					V-8.9
タヌトモマイマイ	1mc, 1u, 5uc	10(6)							V-8.9
オキナワスカウマイマイ	2ab, 2f, 1fbc	4(3)		1uc	[1]				V-8.9
オキナワスカウマイマイ	1mc, 1mbc, 1u, 1uc								V-8.9
二枚貝類(海産)									I-O-a
ヘトリアオリ	0/1	1							I-1-a
エガイ	1f	1							I-1-c
イノハマグリ	1/1	1							I-1-c
シロハナコ	1u/0	1							I-2-a
シロハナコ	f	1							I-2-a
サメササ	f	1							I-2-c
リュウキユツノマタ	f	1							I-1-c
リュウキユツノマタ	1u/0	1							I-1-c
リュウキユツノマタ	f	1							I-1-c
リュウキユツノマタ	1uB/0	1							I-1-c

*f: 沈没部分, **MNI: 貝塚形成時の最少個体数, □: 内は沈没や埋没形成時のものではない個体数
c: 埋没のみ, d: 埋没区, e: 埋没区, f: 埋没区, g: 埋没区, h: 埋没区, i: 埋没区, j: 埋没区, k: 埋没区, l: 埋没区, m: 埋没区, n: 埋没区, o: 埋没区, p: 埋没区, q: 埋没区, r: 埋没区, s: 埋没区, t: 埋没区, u: 埋没区, v: 埋没区, w: 埋没区, x: 埋没区, y: 埋没区, z: 埋没区

表4. 沖永良部島住吉貝塚出土の微小貝類遺体 (4 mmメッシュ未過)

種名(学名)	12号16T #143		12号/層 床付近		12号/層 反側		6号		4号6T #203		生息場所 類型
	LF	HF	土壌層2	土壌層2	土壌層2	土壌層2	A-3,床付近	A-4,川側	土壌層2	土壌層2	
メッシュサイズ(mm)	2	1	1	2	1	2	1	2	1	2	1
種足類(陸産)											
ミシヤマトシ	1										V-7
イダヤク(イダヤク)	6	20	2(1B)	1B				1B	13	6	V-7,8
チヤイロノミギセル	4	8	2	12					4	9	V-8
キハナナギガイ類	3	4	10	4	2	1	1	1		10	V-8
オキノエラフキセル											V-8
オカチヨウジガイ類	53	76	15	3	2						V-8
(出)	38	11	1	2							V-8
(脚)	13	1	1	2							V-8
ナカネガイ類	2										V-8
ハリマキ貝類	14	1	2	4				1			V-8
ヒラタラ											V-8
ワタラマイマイ類	232		84	7				2			V-9
ヒメベッコウ?	(12)		(9)	(3)							V-9
ナカシガイ	435		230	19							V-8,9
ヒメカモノアラガイ	1										V-8,9
タヌトモイマイ	7		1	2	1	1	1		16	13	V-8,9
オキノエラフキセル	23		26	2	1	1	1				V-8,9
オキノエラフキセル	10										V-9
ウエノヘノカド	1										V-9
スナガイ	8		21	1			1				V-9
カウニ	1sj	1w									IV/5,6
種足類(海水産)											
コガモガサ		2u		1B						2u	I-0-a
イシダタミアマオブネ	3	9u(1B),1b	1u				2u(1B)			5u,1bb	2u
イボタマキヒ		2								5(1B),2u(1B),5u(3a)	2u
コンバイトウガイ		2u(1B)		1uc						2u	I-0-a
カヌベイトウガイ		1d		1j,1B						1	I-0-a
カヌベイトウガイsp.		1e									I-0-a
コシダカサエ	1sj	1e									I-2-a
*ホソクネチヨウジ		1		1ue						?1ue	I-2-b
ソノイロチヨウジ											I-2-c
*ベニハヤ	1j	1									I-2-d
ホソクネチヨウジ		2ue									I-3-a
ホソクネチヨウジ											I-3-a
*カニモリガイ類								1ueB			I-3-a
種貝											
二枚貝類(海産)											
ククリネジアサリ		0/1									I-1-a
多板綱(海産)		2w							1w	6	I-1-a
ヒサガイ類											
ナガノニ(脚)											
海産高層性動物											
甲殻類		2bc-1									
炭化植物	280		14	1			0	0			
植物種子(殻薄?)	極多		少	少			普通	多			
植物種子(厚壁)											
ナズナ(宿主)					1		普通				

転名の前のa, b, c, dは、海産層に付随する可能性のある微小海産貝類。記号は表3に同じ。

に共通するものであり(黒住, 2002参照), 関東の縄文時代とは異なった側面を示していると言える。

d. 魚類と貝類採集

沖繩諸島の同時期の遺跡では、魚介類遺体が前後の時期より少ないことが知られていた(沖繩考古学会, 1978)。今回の結果では、ピックアップ法でも比較的多くの貝類遺体が得られ、特に土壌資料を検討することによってかなり多くの遺体が抽出された。さらに、本遺跡では、種泉(本報告書)によって報告されているように、主に小形の魚類遺体が多量に得られている。従来、魚介類遺体が少ないと言われてきた沖繩諸島の貝塚時代中期でも、今帰仁村の西長浜原遺跡のように、遺跡によっては本遺跡と同様に小形魚類遺体が極めて多い例も知られるようになってきた(種泉, 2006)。これらのことから、この時代の漁労では、魚類の漁が主で、貝類採集が従のような現象も想定されるのかも知れない。

2) 貝殻の利用等

本貝塚からは、森田(本報告書)に示されているように土壌資料の水洗選別が行われたこともあり、多様な貝製品が認められている。その中には、タカラガイに似たウミウサギに切れ込みを入れたもの(沖繩島安座間原第一遺跡[貝塚時代中期]; 木下, 1996)や沖繩諸島の先史遺跡から比較的多く出土するサツマビナの螺塔を研磨したもの(例えば沖繩島喜如嘉貝塚[貝塚時代後期] 島袋, 1994)や製品とは認められないかも知れないが、カサガイ類のオオベッコウガサ(沖繩島波上洞埋葬遺跡[貝塚時代後期]; 高宮, 1968に貝輪の例がある)や筒状の形態を有するフタモチヘビガイ等も得られている(付表1)。ヘビガイ類と同様なゴカイ類の棲管は、ほぼ同時期の沖繩島の高嶺遺跡からも得られている(黒住, 1989a)。

また、本遺跡からはかなり多くの海岸で磨滅した小形イモガイ類が得られた(表3)。死殻であり食用ではなく、明らかに人間が遺跡まで持ち込んだものであり、微小なものも含めて本貝塚から大量に得られている貝類(森田, 本報告書)の素材とも考えられる(木下, 1999も参照)。ただ、螺塔部のみではなく、全体が得られているものが多い。

貝製品のオオツタノハは、未加工個体が得られず、これまでの想定のように(黒住, 1994a)、製品として奄美大島の北から、本遺跡に持ち込まれたと考えられる。同様に、製品ではないが、沖永良部島には存在しないマングローブに生息する二枚貝のシレナジミも出土している。さらに、前述のサツマビナも、本遺跡では未加工個体が得られず、本種の生息するイノー内の砂底に多いマガキガイも食用貝類として得られな

かったことから、他地域からの持ち込みと考えられる。このようにみえてくると、本遺跡では、かなり多くの貝製品が、琉球列島の南北から持ち込まれたことが明らかであった。

また本遺跡では、土壌資料から抽出された貝殻を除いても、ピックアップ法で多くの装飾貝製品が得られている。沖繩諸島の同時期の遺跡からは、装飾貝製品の多い遺跡と少ないものが存在する可能性があり(黒住, 2006参照)。住吉貝塚は前者に属すると考えられる。

4) 陸産貝類等からの情報

a. 古環境復元

遺跡から得られる微小陸産貝類から、周辺の環境を花粉分析と同様な方法で復元することはイギリス等において行われてきており(例えばEvans, 1972)、琉球列島でも主に砂丘遺跡で行われてきた(黒住, 1998, 2002等)。ただ、陸産貝類を用いた環境復元の場合、詳細な植生は復元できず、林や草地等の景観を復元することになる。遺跡の周辺環境を理解する場合、植生復元では、植物種に焦点が当たり、樹種の樹齢成や遺跡立地その地点の微細な植生を示すわけではないにも注意が必要と思われる。

本遺跡では、土壌資料が様々な形で処理され、多数の陸産貝類が抽出された。その結果、中形種では(表3) オキノエラブギセル・タメトモマイマイ・オキナワウスカフマイマイといった林縁から開放地に生息する種では遺跡形成時よりも後の時代の個体が多く、オキノエラブヤマタカマイマイ・エラブジュリマイマイ・エラブマイマイといった林内から林縁の種では後の時代のものはかなり少なかった。微小種では(表4)、ヒメベッコウマイマイ類(その多くは、黒住, 1999で報告した地中性と考えられる種かその種に近似したものであった)やオカチョウジガイ類が優占し、全体としても林縁から開放地に生息する種がほとんどで、林内だけに生息する種は極めて少なかった。また、砂丘遺跡で優占するスナガイ等の海浜性の種(黒住, 1998, 2002等)も、比較的少なかった。これらのことから、基本的に本遺跡の形成時に周辺は林縁部から開放地のような開けた環境にあったと考えられる。このことは、この島に固有で林内に生息する中形種のオキノエラブヤマトガイ・ウスチャイロキセルモドキ・ヒロコハクガイ等の種(漢, 1978参照)が全く確認されなかったことも一致する。

ただ、優占していたオカチョウジガイ類で詳細に検討した結果、床付近や灰層でも、後の時代の新しい殻が確認され、今回の微小陸産貝類遺体群は、かなりの時代幅を有するものの可能性も残る。今回、後の時代

の個体を明確に除外できず、詳細は分からないが、遺跡形成時の海岸沿いのやや開けた場所が、放棄後、林に被われたと考えられる。

一方で、今回のサンプル中に認められた種のうち、大形種のエラブマイマイは、現在、島の中央の大山周辺にのみ残存し（浅，1973）、少なくとも本遺跡の時代以降に低地部からは絶滅したことも明らかとなった。同様な状況はオキノエラブヤマタカマイマイでも認められ、本種は現在島内の限られた地域にしか残存していないが（例えば菊池，1967；行田ら，1974）、この時代には島内に広く分布していた可能性が高い。また、今回は微小種も注意深く抽出されたものの、現在ではかなり稀なキバサナギガイ類やナタネガイ類が、ほとんど得られなかった。少なくとも、この両群は、本遺跡のような立地場所では、この時代でも稀であったこともわかった。逆に、現在は島内各所かなり高密度で分布する（例えば菊池，1967）殻高1.5cm程度で厚質の殻を有するキカイキセルモドキがいずれのサンプルからも得られなかった。このことは、キカイキセルモドキが、この時代以降、沖永良部島に人間によって持ち込まれた可能性が高い可能性を示していると考えられる。

b. カタツムリの食用問題

本遺跡では、最初の発掘時に陸産貝類が多く、「貝層はマイマイ類の単純な層であらう」、「マイマイを捕食したものと考えられる」（国分ら，1959）とされた。今回の調査でも、住居跡内に陸産貝類の層が認められ（図表、私信）、小形貝類として多くの個体が確認されており（表3）、従来の指摘と同様であった。しかし、4mmメッシュ上に残ったサンプルでは（表3）、オキノエラブギセル・タメトモマイマイ・オキナワウスカワマイマイといった林縁から開放地に生息する種では遺跡形成時より後の時代の個体が多く、オキノエラブヤマタカマイマイ・エラブシュリマイマイ・エラブマイマイといった林内から林縁の種では後の時代のものはかなり少なかった。この後の時代のものが多いということも、本遺跡で陸産貝類が多いと認識された要因の一つであろう。

ただし、上記のように確実に混入のないと思われる堆積環境でも、大形種（エラブシュリマイマイとエラブマイマイ）が優占すると思われる層が認められている訳である。このことは、「大形のカタツムリを食用としたために生じた」とも考えられる。しかし、ほぼ同時期の沖縄島知床塚原遺跡の住居跡内貝層から多数得られた中形陸産貝類のオキナワヤマタニシは、いくつかの住居跡でも一部のものに集中し、同程度のサイズの海産種より貝層上部に認められることから、食用ではなかったと考えられている（黒住，1988）。同じ

く沖縄諸島の高嶺遺跡でも、陸産貝類は、その集中性や極めて高い優占率から、やはり食用ではない可能性が指摘されている（黒住，1989a；黒住・金城，1988も参照）。

このように本遺跡においても、報告者の結論は、陸産貝類は食用ではなかったと考える。住居跡に大形の陸産貝類が多かったということは、微小陸産貝類で示したように開けた空間の住居が利用されなくなり、大形種が林から分散してきて、死亡したために陸産貝類の層が形成されたものと推測される。黒住・古野（2002）は、火山地域で新たに成立した林に分散してくる陸産貝類は、匍匐という大形種と風による微小種という両極端なサイズ組成で形成される可能性の高いことを示した。今回の例では規模は極めて小さくなるが、開けた空間への同じような分散パターンを陸産貝類が示した結果だと考えられる。また大形種のエラブシュリマイマイやエラブマイマイは、表3に詳細に示したように、小形の個体が少なかった。これは、林から分散してきたものの、放棄され貝塚は彼らの繁殖（産卵・成長）には好適ではなかったためと理解できよう。このように堆積層内に陸産貝類の層が形成されているということは、逆に貝殻投棄が行われなくなり、人為的な行為が少なかったことを示す事象として捉えることもできよう。今後、住居跡内での詳細な土器型式の分類によって、この陸産貝類の形成と住居廃棄の関係が明確になってくると思われる。

c. 「焼き畑農耕」等

沖縄諸島の同時期の同様な遺跡で、林縁に生息する陸産貝類の多い出土等から、焼き畑農耕が想定されたこともあった（伊藤，1993）。遺跡出土の植物遺体の研究から、この見解はほぼ否定されている（高宮，2002等）。今回の陸産貝類群では、確実に遺跡形成時（か、その直後）の種としては林内に生息するエラブマイマイが多かったことから、焼き畑農耕は否定されよう。また報告者は、この時期に淡水性のヌノメカワニナの出現から水生タロイモ等の根菜農耕を想定しているが（黒住，2003）、今回、僅かに淡水性の種としてはカワニナが認められたが、ヌノメカワニナは得られず、追加情報を得ることはできなかった。

5) 灰層やその関連事項

今回処理できた土壌資料のうち12号住居の灰層や6号住居のIII層は、他の包含層とに色調等で区別され、灰層と考えられているが（森田，本報告書）、浮遊部分でも実際には炭化物はかなり少なかった（表4）。ただ、小さな“焼け土”は多いようであった。このような層の内容・性格に関して、興味を持たれる。黒住（2005）は、奄美大島の古代相当期の砂丘遺跡で、考

古学的に灰層の可能性の考えられた層の微小貝類を検討して、灰層ではなく、淡水の影響のあった堆積物だということを明らかにした。今回の12号住居の灰層では、微小陸産貝類が比較的多く得られ、当然陸上での堆積物だと考えられる。そして前述したように、これらの層のからも新しいオカチョウジガイ類も得られており、考古学的には安定したように考えられる層ながら、微細な遺物に関しては、僅かながら後代の影響を受けていると考えられる。

今回、直接に炉跡の土壌を検討しなかったが、上記の灰層等から得られたサンプルを検討した限りでは、炉を放棄する折りの“祭祀的な貝類”（例えば時代と地域は異なるが、鈴木、1992等）は認められないようであった。ただ、リュウテン等、通常の食用種とは異なった貝製品の可能性を含む貝類が強く焼けているような例が散見された（付表1）。これは、もしかすると、祭祀的な意味を含め、何らかの意図を持つのかも知れない。

詳細な検討を全く行っていないが、もしかしたら、穀類とも思われる微細な炭化種子が、6号住居の床付近の土壌資料から多数確認された（表4）。ただ、カタツムリから、明らかに床面でも後の時代のものが得られており、この炭化種子も、縄文時代のものではないと考えられる。ただ、もし穀類であったならば、直接的な炭素年代の測定によっても、もしかしたら、現代よりは古い時代（中世程度？）の値が得られ、本島における農耕の変遷を知る資料になり得るかもしれない。

引用文献

- Evans, J. G. 1972. Land Snails in Archaeology. 436 pp. Seminar Press, London-New York.
- 伊藤隆二. 1993. 琉球縄文文化の枠組み. 南島考古, (13):19-34.
- 加納哲哉. 2001. 微小動物遺存体の研究. 國學院大学大学院研究叢書. 文学研究科7. 227 pp. 國學院大学大学院, 東京.
- 河口貞徳. 1988. 日本の古代遺跡. 38. 鹿児島. 246 pp. 保育社, 大阪.
- 菊池典男. 1967. 徳之島・沖ノ永良部島. 陸貝の採集報告. かいなま, 1(3):20-32.
- 木下高子. 1996. 南島貝文化の研究. 貝の道の考古学, x + 576 pp. 法政大学出版会, 東京. (第3章 貝の葬送習俗—沖縄県真志喜安座間原第一遺跡の報告から, pp. 449-478.)
- 木下高子. 1999. 東亜貝珠考. In 先史学・考古学論究, 白木原和美先生古希記念献呈論文集, III, pp. 315-354. 龍田考古会, 熊本.
- 国分直一・河口貞徳・曾野孝彦・野口義麿・原口正三.

1959. 奄美大島の先史時代. In 九学会連合奄美大島共同調査委員会(編), 奄美—自然と文化. 論文編, 92 pp. 日本学術振興会, 東京. (河口貞徳. 沖永良部住吉貝塚の調査; 1996. 復刻発行, 沖縄県立図書館)
- 黒住耐二. 1988. 軟体動物遺存体. In 岸本義彦(編), 知城塚原遺跡発掘調査報告. 本町町文化財調査報告書, (5): 95-115. 本町町教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二. 1989a. 高嶺遺跡出土の貝類遺存体. In 金武正紀 金城電信(編), 宮城島遺跡分布調査報告, 沖縄県文化財調査報告書, (92): 179-189, 2 pls.
- 黒住耐二. 1989b. 軟体動物遺存体. In 岸本義彦(編), 宇佐浜遺跡発掘調査報告, 沖縄県文化財調査報告書, (93): 95-117.
- 黒住耐二. 1994a. オオツタノハの供給. 南島考古, (14):57-64.
- 黒住耐二. 1994b. 柱状サンプルから得られた微小貝類遺存体. 慶應義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報, (9):291-317, 3 pls.
- 黒住耐二. 1997. 1996年の用見崎遺跡調査でコラムサンプルから得られた貝類遺存体. In 若杉竜太・尾上博一(編), 用見崎遺跡III, 考古学研究室報告, (32):35-41. 熊本大学考古学研究室.
- 黒住耐二. 1998. 1997年の用見崎遺跡調査で得られた貝類遺存体(予報). In 若杉あずさ(編), 用見崎遺跡IV, 考古学研究室活動報告, (33): 38-45. 熊本大学文学部.
- 黒住耐二. 1999. 1998年のナガラ原東貝塚調査で得られた貝類遺存体(予報). In 藤江望(編), ナガラ原東貝塚, 考古学研究室活動報告, (34): 40-48. 熊本大学文学部.
- 黒住耐二. 2002. 貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活. In 木下高子(編), 先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—, pp. 67-86. 熊本大学文学部.
- 黒住耐二. 2003. 軟体動物. In 西田睦・鹿谷法一・諸喜田茂光(編), 琉球列島の陸生生物. pp. 167-180. 東海大学出版会, 東京.
- 黒住耐二. 2005. 用安良川遺跡から得られた貝類遺体(予報). In 安良川遺跡, 笠利町文化財調査報告書, (27):72-76. 笠利町教育委員会, 鹿児島.
- 黒住耐二. 2006. 西長浜原遺跡出土の貝類遺体. In 瀬戸賢也(編), 西長浜原遺跡, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書. (印刷中)
- 黒住耐二・古野勝久. 2002. 栃木県那須御用邸付属地の陸産貝類類とその特徴. In 栃木県立博物館(編), 那須御用邸の動植物相. 栃木県立博物館研究報告書, pp. 63-68. 栃木県立博物館.
- 黒住耐二・金城電信. 1988. 豊見城村の長嶺. 保英茂

- および平良グスク試掘調査により出土した貝類。In 金城亀信(編)。豊見城村の遺跡。豊見城村文化財調査報告書, (3):137-153。豊見城村教育委員会, 沖縄。
- 淡宏。1973。エラブマイマイの現棲標本について。Venus, 32:51-52。
- 淡宏。1978。沖永良部島・与論島の陸産貝類相。日本生物地理学会会報, 33:1-8。
- 沖縄考古学会(編)。1978。石器時代の沖縄。140 pp。新星図書, 沖縄。
- 島袋春美。1994。貝製品。In 豊見山旗・島袋洋(編)。喜如嘉貝塚。沖縄県文化財調査報告書, (114):35-47。
- 鈴木素行。1992。武田石高遺跡第14号住居跡に認められる儀礼的行為の痕跡。In 鈴木素行(編)。武田V。(財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告, (7):99-103, 106。(財)勝田市文化・スポーツ振興公社, 茨城。
- 高宮広衛。1968。那覇市の考古資料。In 那覇市史資料篇。第1巻1。pp. 242-393。那覇市役所, 沖縄。
- 高宮広土。2002。植物遺体からみた奄美・沖縄の農耕のはじまり。In 木下尚子(編)。先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—, pp. 35-46。熊本大学文学部。
- 幡泉岳二。2006。西長浜原遺跡の脊椎動物遺体。In 瀬戸哲也(編)。西長浜原遺跡。沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書。(39) (印刷中)
- 上地千賀子。1986。貝類遺存体。In 岸本義彦(編)。具志堅貝塚調査報告。本部町文化財調査報告書, (3):25-34。本部町教育委員会, 沖縄。
- 行田義三・加藤繁富・高橋五郎・泊秀治・浜田善利・山本愛三。1974。沖永良部採集記。九州の貝, (3):53-59。

第V章 まとめ

本貝塚の発掘調査は、農業が盛んで基盤整備が進み、昔ながらの畑の風景が消えゆき、道跡も消滅していく中で、沖永良部島らしい遺跡の保存を目的に、文化庁等の補助を受け始まった。

個人による畑地の天地返し、あるいは石灰岩除去作業が行われて、どれだけ道跡が残っているか不安であった。発掘調査に入ってみると、包含層が旧地形の凹凸の凹地に残存し、また住居跡のプランの上に包含層が残っていることもあり、当初遺構の把握が困難であった。包含層検出後にグリッドを設定し、下の遺構を採すなど試行錯誤もあった。また保存を前提として、どれぐらい発掘すればよいのか、担当者間でよく議論したものである。

包含層や遺構の埋土には有機遺物を多量に含んでおり、粘土の包含層や埋土を掘ることで、それらを砕きながらの発掘は、貝製品や骨角製品の破損が予想された。これを防ぐため、動力噴霧器と竹串や竹べらの調査で、遅々として進まなかった。排土は、現場で篩いにかけて、粘土のたまとした。ただ幸いにも当初からウォーターフローテーションによる植物遺体の検出を想定していたので、結果的に貝類遺体や動物骨・魚骨などを遺構埋土に関する限りはもれなく採集できた。これも排土の水洗いに携わった森田・岡越・木下の根気と努力の結果である。まさに貝塚と同様のすさまじい情報量であった。このため各分野を専門とする先生方にお手数をかけたが、多面的な分析やアプローチができた。なお発掘調査等については、改善の課題も感じながら、以下に調査の成果を簡単にまとめている。

遺物について

土器は、トレンチ全体で16類に分類した。16類については1～15類に分類できなかったものを含めている。

1～16類を既存の土器型式に当てはめると、1類-古我地原1式土器、2類-面縄東洞式土器、3類-嘉徳1式A土器、4類-嘉徳1式B土器、5・6類-嘉徳II式土器、7類-伊波・菟堂式土器、8類-大山式土器・室川式土器類似、9類-犬田布貝塚II類該当、10類-面縄西洞式土器、11類-無文土器、12類-犬田布式土器、13類-喜念1式土器、14類-宇留上層・宇佐浜式・仲原式土器、16類-その他の土器類となる。

1類の古我地原1式土器は、古我地原貝塚で、面縄前庭式と仲泊式土器の中間タイプとされていた一群のうち、面縄前庭式の要素の多いもの(Aタイプ)で、

縄文時代中期末に位置づけられている(堂達 2003)。9類は、犬田布貝塚のII類に類似している。これは、「土器構成においてより面縄西洞式土器の系統を色濃くのこすもの」(吉永・宮田 1984)とされている。14類は、口縁部形態、肥厚部の断面形状等により、細分が可能であったが今回は一括して取り扱った。16類として一括したものには、黒川式土器(145)、カヤウチパンタ式土器(474)、有輪羽状縁縄文土器(64・418)などが含まれる。有輪羽状の縁線が施される土器は、上城遺跡で、完形の良好な資料が出土している。

これらの土器を、現行の編年に照らし合わせると、1類が縄文時代中期末、2類～11類が縄文時代後期、12類～13類が縄文時代晩期、14類が縄文時代晩期から弥生時代初頭に位置づけられる。なお13類と14類は同一土器様式の可能性が高く、14類の口縁部断面が三角形の土器と併せてそれぞれで器種として存在する可能性が高い。5号住居跡、12号住居跡、14号住居跡などで出土する土器をみると、13類と14類がともに出土する傾向が見取れる。数的に最も多い土器は14類土器である。

土器の胎土は、粘土質で、砂礫等を多く含むものをA類、泥質で、胎土の細かいものをB類とした。出土数はA類が多く分類可能な口縁部・胴部片の約9割を占める。B類の胎土のものは、10類に分類した鉢形土器(71・72・142・143・144・560)に高い割合で見られる。また、14類の口縁部断面が三角形や前鋒状に肥厚するものにも1割弱の割合で見られる。この点については、特定の型式・器種に特長的に見られるものであるが、他の遺跡の状況をふまえて今後検討する必要がある。また金雲母を含む胎土を持つ土器については、金雲母が花崗岩に由来するものである。

石器では、石斧の石材として緑泥片岩が多く見られる。一部に花崗岩もあり、島外からの搬入が考えられる。またチャートや黒曜石が出土しているが、これらも搬入と思われる。磨石・敲石は砂岩のものが多い。緑泥片岩や頁岩を素材とし、扁平な槌長を中心とする剥片を剥出し、背部に整形剥離を施し、一側縁が鋭く刃部として使用されたものがあつた。縄文時代の石器として、スクレイパーとして分類したが、用途については、今後とも検討が必要である。

磨製石斧については、刃部が研ぎ出されているものも破損品が多く、補充のための未製品を所持し、破損品の補充が行われていた可能性が高い。

239・368 は骨杖製品として当初扱ったが、神縄での分類に従ってかんざしとする。

貝玉については、出土品は3点ほどで、のこりは水洗の結果検出したものである(図版56参照)。イモガイ製の貝玉については、計測を67個についておこなっ

た。素材・未製品・製品があり、この遺跡で製作された可能性もある。

貝製品については、5号住居跡と12号住居跡で多く出土した。

遺構について

住居跡については、九学会調査時の住居跡は残念ながら整地により消失していたが、確認できたもので、合計14基であった。このうち、2号土坑は検出面の平面図から2基の切り合いの住居跡が想定され、9号住居跡については、2基の切り合いの可能性もある。また、15トレンチでも11号住居跡の南側にしっかりした落ち込みがあり、16トレンチの中央部と14号住居跡の北側隅に方形の礎部分があり、さらに増えて20基を越える可能性がある。住居跡の形態は、プラン全体を検出していない10号住居跡を除くと、9号住居跡が地山を掘り込み、そのまま壁とするタイプ、1号住居跡・2号住居跡・3号住居跡・4号住居跡・11号住居跡が周囲の一部に礎を配するタイプ、5号住居跡・6号住居跡・7号住居跡・8号住居跡・12号住居跡・13号住居跡・14号住居跡が石組を形成するタイプである。住居跡について切り合いからわかる新旧関係は、4トレンチが1号住居跡→2号住居跡、6トレンチが4号住居跡→3号住居跡、10トレンチが9号住居跡→7・8号住居跡→6号住居跡、16トレンチが14号住居跡→13号住居跡である。ただし、7・6号住居跡と8号住居跡は、切り合い関係がないため遺構からの新旧関係は判断できない。

これに、遺構出土の土器の傾向を加えて考えると、1号住居跡が縄文時代後期土器のみ、2号住居跡が、後期から晩期の土器がみられる、判断した個体数は少ないが2号住居跡に新しい要素がみられる。4号住居跡・3号住居跡は、ともに14類を中心に出土しているが、14類の口縁部形態を細分すると、4号住居跡は、大部分が断面三角形や蒲鉾状に肥厚するもの（肥厚タイプ）であるのに対し、3号住居跡は、肥厚タイプが最も多いが、口縁部肥厚帯が厚みのない間延びした三角形や明確な段をもたないもの（低平タイプ・仲原式）も比較的多く出土している。口縁部形態の肥厚（宇宿上層系統）→低平（仲原式）という変化の方向性（新里 1999）を考えると、3号住居跡が4号住居跡よりやや新しい要素がみられる。6号住居跡～9号住居跡は、9号住居跡が、縄文時代後期で、6号住居跡が下層・上層ともに14類肥厚タイプ、8号住居跡が14類の低平タイプの出土が多い。このことから、9号住居跡→7号住居跡→6号住居跡上層・下層→8号住居跡という時期の変遷が考えられる。13号・14号住居跡は、13号住居跡が14類低平タイプ、14号住居跡が12類の

時期に該当すると思われる。以上の結果に、単独で検出された5号住居跡、11号住居跡、12号住居跡を加えると、1号住居跡・9号住居跡（縄文時代後期）→2号住居跡・11号住居跡・14号住居跡（犬布式期）→4号住居跡・5号住居跡・6号住居跡・12号住居跡（宇宿上層・宇佐浜式期）→3号住居跡・8号住居跡・13号住居跡（宇宿上層・仲原式期）という変遷が考えられる。

土坑については、出土土器から1号土坑が縄文時代後期に位置づけられ、2号土坑は、上層部分のみの掘り下げで判断が難しいが出土土器や隣接する住居跡の時期などから縄文時代晩期に位置づけられる可能性がある。3号土坑については、掘り下げをおこなっておらず不明である。

自然遺物

自然遺物については、各氏の分析の結果、次のようなことが指摘されている

環境

・貝塚形成当時の遺跡周辺の環境は、林縁から開放地の開けた環境にあり、海岸は、基本的に現在と同様であったと考えられる。（貝類遺体・魚類遺体）

生業

- ・焼畑農耕等の存在は否定的であり、奄美及び沖縄諸島の縄文時代晩期の生業が狩猟採集であったことを支持する結果となった。（植物遺体・貝類遺体）
- ・陸生の哺乳類ではイノシシをよく狩猟し、食していたことがうかがわれる。イノシシは、リュウキュウイノシシ系統であることが想像される。（動物遺体）
- ・イヌは、狩猟の伴侶や番犬として飼われていたことが考えられる。（動物遺体）
- ・漁労の内容は、サンゴ礁域での多様な魚を対象とした漁が主力であり、とくに小型魚を対象とした漁が活発であったと推定される。（魚類遺体）
- ・トビウオ科やソウダガツオ属などに代表される外洋性回遊魚の出土から、外海域での回遊魚漁の展開が確認された。（魚類遺体）
- ・食用貝類は、オキニシ・ハナマルユキ・シラナミ・チョウセンザザエなどの岩礁性の貝類が多く、砂底に生息する種は少ない。小型貝類の「ダシの利用」が考えられる。（貝類遺体）
- ・シャコガイ類のシラナミは、食用として好まれていたように、比較的小型のものまで採集していた。（貝類遺体）
- ・カタツムリについては、大形種が林から分散してきて死亡したもので、食用ではなかったと考えられる。（貝類遺体）

交流

- ・シカの角は、奄美諸島に生息の史実がないことから交流で持ち込まれたものと考えられる。(動物遺体)
- ・貝製品のオオツタノハやサツマビナなども未加工個体が得られていないことなどから他地域からの持ち込みと考えられる。(貝類遺体)

上記のように、自然遺物の同定・分析により、本貝塚の狩猟採集を中心とした生業の様相や環境、交流等が明らかにされ、奄美大島と類似する点や本貝塚に特徴的にみられることなどがあげられている。また、奄美・沖縄諸島という広い視点からも新たなデータが蓄積され大きな成果があったと考えられる。高宮氏によると、イタジイ・タブノキ・シマサルナシは秋に集中して収穫できるように、夏から冬にかけて利用された住居跡の可能性も指摘されている。島という面積の狭い空間で狩猟採集による生活を維持するために、当時の人々がどのような行動(他の島の人々とのコンタクト・遊動など)をとったのかという視点も意識しながら、多方面から検討していくことが必要だと考えられ、今後の課題としたい。

住吉貝塚の発掘調査に当たって、集落跡であり、貝塚の名はあたらないとの指摘もある。研究の初期に、有機遺物の多さから「貝塚」として遺跡の認定を行ってきた学史もある。発掘の手法においては貝塚の発掘調査と同じであった。そこで遺跡名はそのまま使うこととした。

さて反省点としていくつかあげて、今後の調査の参考としていただきたい。

- ・竹べら、竹串は欠かせない。それでも破砕する遺物があるので、むしろ金属製の「はし」のようなものが適する可能性がある。
- ・水洗が現場で可能なようにする必要がある。土嚢袋に入れた排土の運搬等は重労働であり、水洗後の土の処理も大変である。
- ・サンプリング等に、早い段階で専門家との打ち合わせが必要である。有効性を高める方策を講じたい。
- ・排土排出にあたり、グリッドごとの区分けを行わなかった。住居跡内でも、生活動態の復元の資料が得られる可能性があり、こまめな地区分けも必要な部分がある。
- ・住居跡は切り合いや、同一堅穴の再利用が見受けられたため、堆積層の把握と、層ごとの遺物等の分別がさらに必要である。
- ・遺物の平板ドットは参考程度で、貝塚の堆積に合わせた調査と同様の理由から、あまり意味をなさない。
- ・貝塚の発掘調査と同様に、時間をかけた調査が必要である。ゆっくりと気長に構える。作業員の確保が

難しく少人数での調査であったが、それが幸いした感がある。

沖水良部島に個性的な文化を形成しながら、奄美・沖縄の高々と深い関連性を持っていたことが理解された。

本貝塚の住居跡は発掘したものではなく、それでも住居跡埋土からの有機遺物を含む多くの遺物が膨大な情報を提供してくれた。この報告書で報告できた内容はほんのプロローグに過ぎない。今後、採集された微小な貝類や魚骨等の分析も継続するつもりである。

住吉貝塚は、縄文時代後期から弥生時代前期に継続した住居跡群であり、奄美を代表する遺跡であるとともに、列島の多様な文化を理解するに欠かせない日本の貴重な遺跡であるといえる。

(引用・参考文献)

- 堂込秀人 2003 「琉球列島縄文時代後期土器の系譜—古我地原式土器の認定と細分から—」『考古論集』河瀬正利先生退官記念論集刊行会
- 吉永正史・宮田栄二 1984 「犬田布貝塚」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 伊仙町教育委員会
- 堂込秀人 1999 『塔原遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 天城町教育委員会
- 牛ノ浜 修・堂込秀人 1983 『面鏡第1. 第2貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 伊仙町教育委員会
- 伊藤慎二 1994 「沖縄編年の現状と諸問題」『史学研究集録』第19号 國學院大學大学院日本史専攻大学院会
- 新里貴之 1999 「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究』第11号 人類史研究会
- 堂込秀人 1995 「南西諸島における堅穴住居跡—縄文時代晩期から弥生時代相当器の変遷—」『古代文化』第47巻第1号 古代学協会

住吉貝塚圖版



住吉貝塚周辺航空写真（昭和52年撮影）



①住吉海岸 ②住吉港から
③台風の海

④山手から
⑤徳時方向

重機による表土剥ぎ



発掘調査風景



動力噴霧器使用状況





① T 遺物出土状況 ② 1号土坑掘り下げ状況
③ 1号土坑半掘り状況

④ 1号土坑検出状況 ⑤ 1号土坑遺物出土状況
⑥ T 完掘り状況



① 2 T包含層遺物出土状況

② 2 T混貝層サブトレンチ設定状況

③ 混貝層土器出土状況

④ 集石検出状況

⑤ 2 T混貝層サブトレンチ

⑥ 混貝層土器出土状況



①混具層鹿角出土状況 ②3 T 遺物出土状況
③4 T 掘り下げ状況

④2 T 調査状況 ⑤4 T 掘り下げ状況
⑥4 T 掘り下げ状況



① 6 T遺構検出状況 ② 2号土坑検出状況
③ 3号土坑検出状況

④ 2号土坑土器出土状況
⑤ 3号住居跡検出状況



①



⑤



②



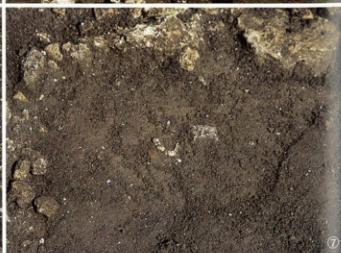
⑤



③



④



⑦

①3号・4号住居跡検出状況 ②5号住居跡一部検出状況
③5号住居跡骨製品出土状況 ④5号住居跡土器出土状況

⑤4号住居跡掘り下げ状況 ⑥5号住居跡掘り下げ状況
⑦5号住居跡具輪出土状況



10T 遺構検出状況
10T 遺構配置状況



①6号住居跡床面付近遺物出土状況
②6号住居跡掘り下げ状況 ③6号住居跡灰層検出状況

④6号住居跡半掘り状況 ⑤6号住居跡遺物出土状況
⑥6号住居跡完掘り状況



①



④



②



⑤



③



⑥

①8号住居跡検出状況 ②9号住居跡サブトレンチ設定状況
③9号住居跡サブトレンチ床面検出状況

④8号住居跡床面付近遺物出土状況
⑤9号住居跡サブトレンチ床面検出状況 ⑥10T調査状況



①10号住居跡一部検出状況 ②11号住居跡掘り下げ状況
③11号住居跡石器出土状況

④15T 遺構検出状況 ⑤11号住居跡検出状況
⑥11号住居跡土器出土状況 ⑦11号住居跡断面



11号住居跡（南から）

11号住居跡（西から）

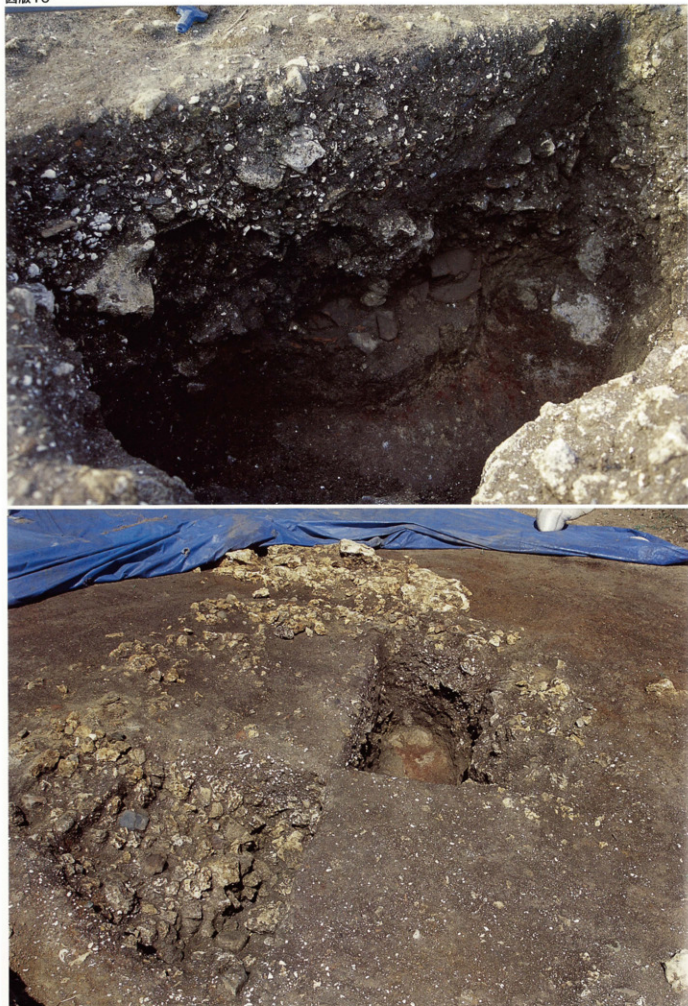


16T 遺構検出作業
16T 遺構検出状況



①12号住居跡検出状況 ②12号住居跡掘り下げ状況
③12号住居跡遺物出土状況

④12号住居跡貝類出土状況 ⑤12号住居跡遺物出土状況
⑥12号住居跡土器出土状況



12号住居跡焼土検出状況
12号住居跡調査状況



①13号・14号住居跡検出状況 ②14号住居跡サブレンチ
遺物出土状況 ③14号住居跡サブレンチ土器出土状況

④13号・14号住居跡サブレンチ
⑤13号住居跡サブレンチ遺物出土状況



①



④



②



①17T 暗褐色部分 ②17T 遺物出土状況
③水洗後遺物

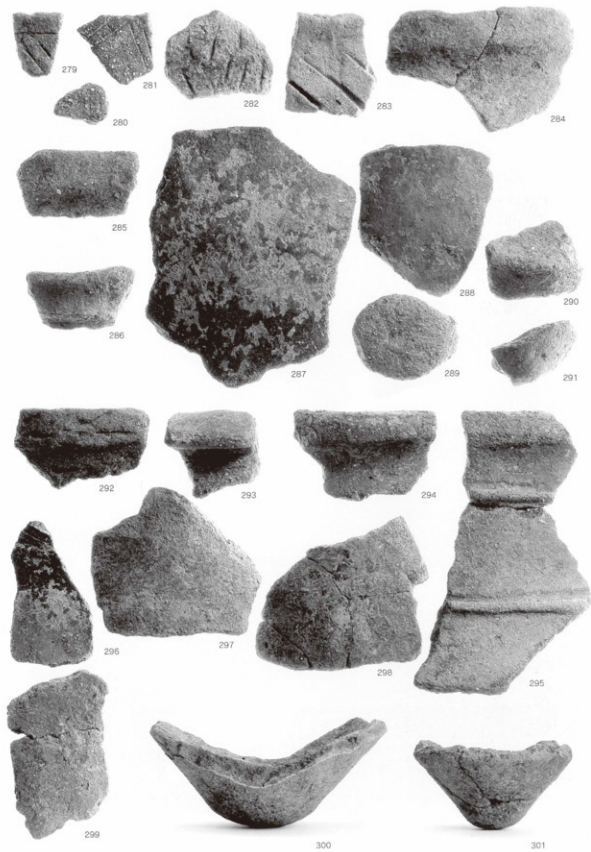


④17T
⑤ウォーターフローテーション



1号土坑出土遗物





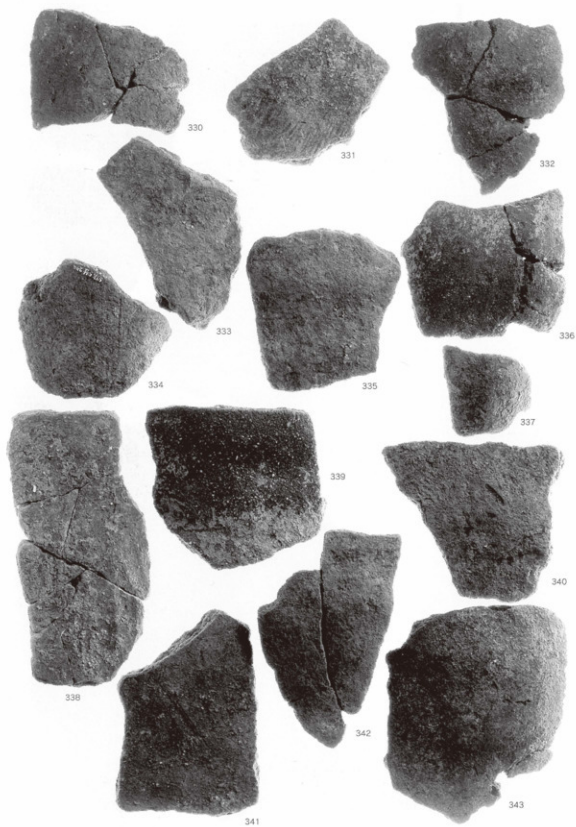
3号·4号住居跡出土遺物

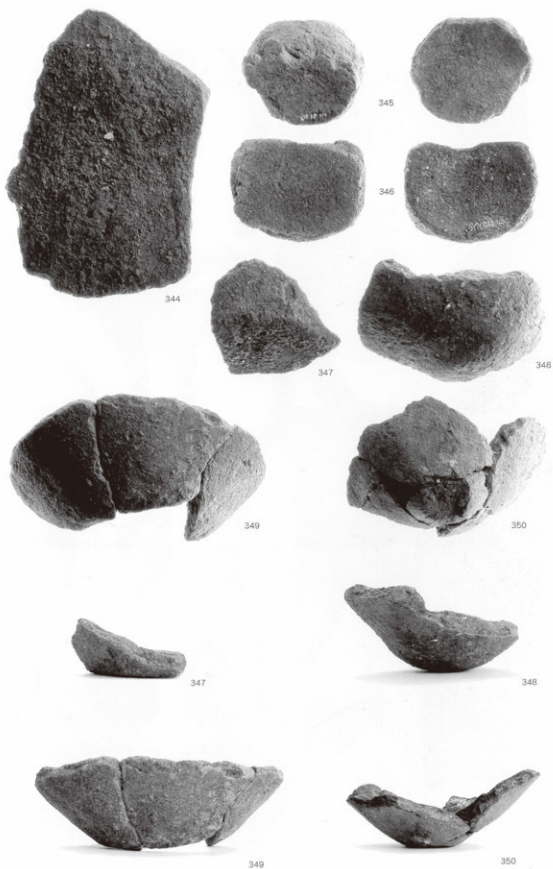


5号住居跡出土遺物(1)



5号住居跡出土遺物(2)





5号住居跡出土遺物(4)



6 トレンチ出土遺物



6号住居跡出土遺物 (1)



6号住居跡出土遺物(2)



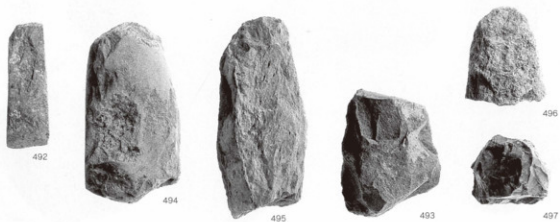
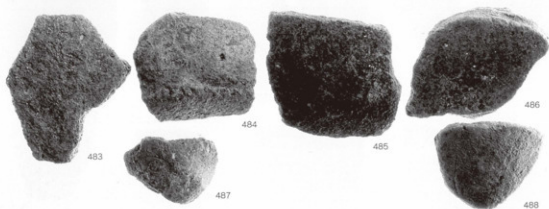
7号・9号住居跡出土遺物



8号住居跡出土遺物



11号住居跡出土遺物 (1)





12号住居跡出土遺物(1)



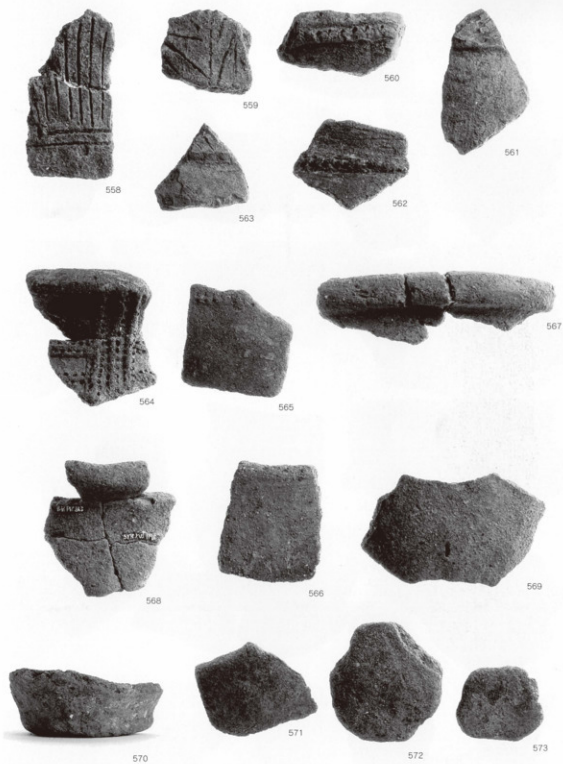
12号住居跡出土遺物 (2)



12号住居跡出土遺物 (3)



13号住居跡サブトレンチ出土遺物



14号住居跡サブトレンチ出土遺物



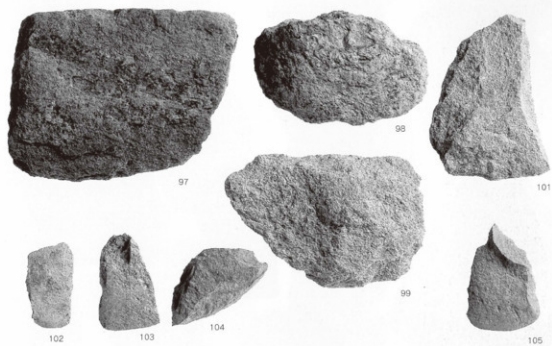
1 トレンチ出土遺物 (1)



1 トレンチ出土遺物 (2)



1 トレンチ出土遺物 (3)



108
109 107
110 106

1 トレンチ出土遺物 (4)



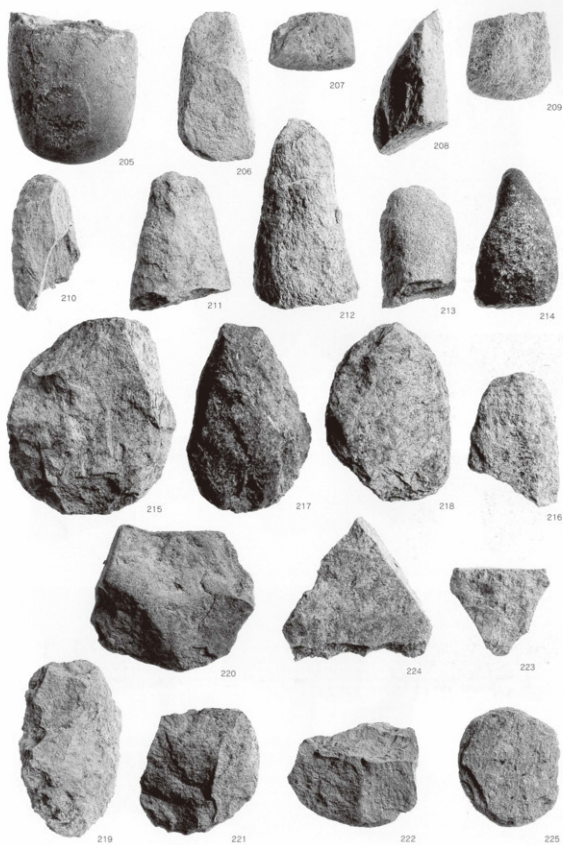
2トレンチ出土遺物(1)



2 トレンチ出土遺物 (2)



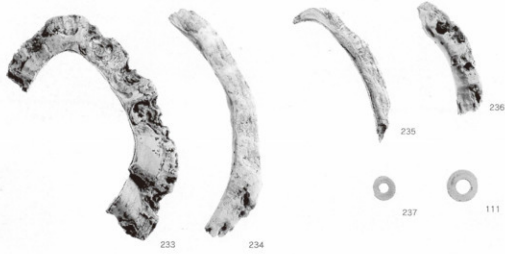
2 トレンチ出土遺物 (3)



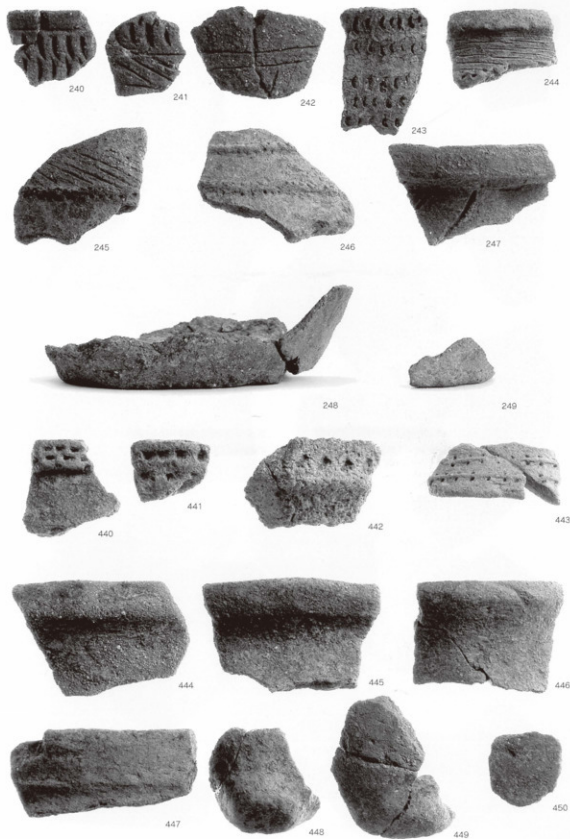
2 トレンチ出土遺物 (4)



227
228 231
230
226 232
229



2 トレンチ出土遺物 (5)



3 トレンチ・10 トレンチ出土遺物



4 トレンチ出土遺物 (1)



4 トレンチ出土遺物 (2)



452
454 451
453



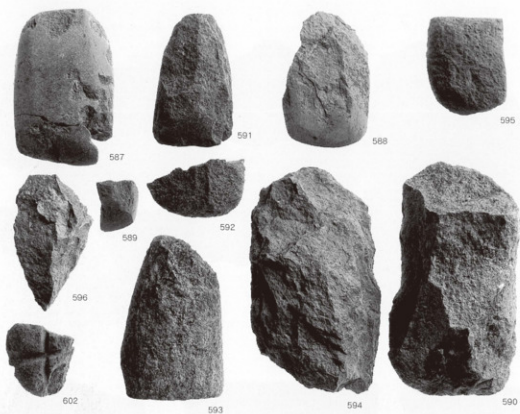
455

456

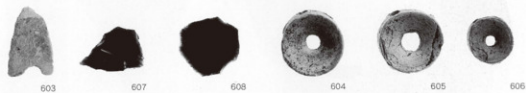
457



16トレンチ出土遺物 (1)



16トレンチ出土遺物 (2)



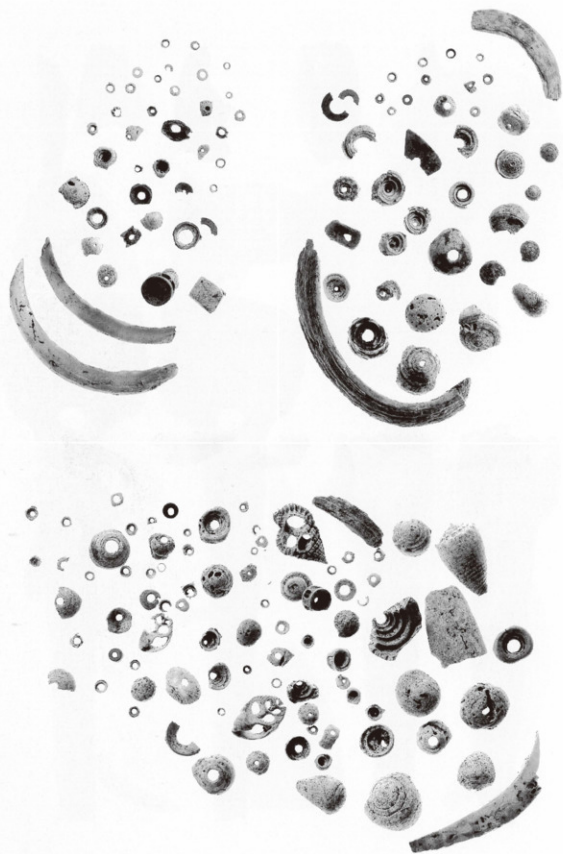
16トレンチ出土遺物 (3)



17トレンチ出土遺物・表採貝製品



2 トレンチ・6 トレンチ・16 トレンチ出土遺物



5号住居跡・11号住居跡・12号住居跡出土遺物



6 トレンチ出土遺物 (2)



2トレンチ・6トレンチ出土遺物



住吉貝塚周辺航空写真2（昭和52年撮影）

図版60



九学会連合調査地点 (1)
九学会連合調査地点 (2)



発掘調査風景 (1)
発掘調査風景 (2)



発掘調査風景 (3)
現地説明会

知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（10）

住吉貝塚範囲確認発掘調査事業報告書

住 吉 貝 塚

発 行 日 2006年3月30日

編集・発行 知名町教育委員会

〒891-9214 鹿児島県大島郡知名町知名307

印 刷 洲上印刷株式会社

〒892-0845 鹿児島市樋之口町6-6